
君と私の恋愛模様

依槻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と私の恋愛模様

【Nコード】

N1656W

【作者名】

依槻

【あらすじ】

家庭教師ヒットマンリボンの二次創作作品です。

平凡な女の子が沢田綱吉くんに恋をしていく過程を書いたお話です。

プロローグ

好きになど、なりたくなかった。だって、私の恋は叶わないとわかってるのだから。なのにどうして、想いは溢れるのだろう。

「ツナ君、おはよう。」

「おはよう、京子ちゃん！」

私の隣で明るい声で挨拶を交わす2人。笹川京子と沢田綱吉。私は沢田くんとは数えるほどしか話したことがない。2人が私の隣で会話を楽しんでいるのは私と京子が友達で、京子が私の席に話に来ているからだ。

「えっと、西崎さんもおはよう。」

「おはよう。」

私はちらり、と沢田くんの顔を見てすぐに視線を戻して挨拶を返した。素っ気ない私の態度に沢田くんが苦笑いしているのが声でわかった。

「おい、西崎！10代目に対してなんだその態度は！」

出たな、忠犬。大声で現れたのは沢田くんの忠犬、獄寺隼人。何だか知らないけど、誰にも媚びたりへつらったりしない彼が沢田くんには従っている。私としては鬱陶しいだけなんだけど。

「あんたにとっては大事な10代目なんだろうけど、私にとって沢

田くんはただのクラスメート！どんな態度とったって問題ないと思うんですけど？」

立っている獄寺くんを睨みつけながら言えば、彼はわなわなと震えていた。

「相変わらず千景は厳しいな。」

ピリピリした空気を破ったのは幼なじみの山本武だった。いつも通りニコニコと笑いながら沢田くんの隣に立っていた。

武が沢田くんたちとつるむようになったのは中学の時から。沢田くんと関わってから武はちよつと変わった。何がって言われると言えないけど、1つ上げるとしたら、友達を何よりも大切に思うようになったと思う。

「山本、おはよう。」

「はよつ、ツナ。」

獄寺くん程ではないが武も沢田くん至上主義っぽいところがある。以前一度だけ聞いた時、彼は沢田くんに多くの事を教わったのだと言っていた。

沢田綱吉。

みんなが彼に魅せられる。それは勉強が出来るからとか、運動神経がいいからとかではない。というかそもそも沢田くんは勉強できないし、運動神経はよくない。でも、みんなにはそんなこと関係ないのだ。沢田綱吉には人を惹きつける力がある。

1-1 笑顔

私が笑ったら、君はとても嬉しそうに笑った。・・・変な人、そう思うのに私から零れたのはやっぱり笑顔だった。

「山本くんかっこいいな。」

広い方のグラウンドで野球をする男子を眺めながら友人の伊藤美砂緒は惚れ惚れと呟いた。美砂緒お目当ての武の方をじっと見るが別段格好よく見えるわけじゃない。たぶん武は格好いい部類に入るのだろうけれど私には野球が大好きなただの男の子にしか見えない。

「ばかね、美砂緒。あんなのただの野球バカじゃない。」

野球の見学をしていた私たちの元にやってきたのは黒川花。同い年とは思えないほど大人びていてお姉さんみたいな人だ。

「何よ、花。山本くんは十分かっこいいよ。」

むっとした様子の美砂緒に花はやれやれ、と言った感じでため息をついた。

「男はやっぱ年上よ。牛柄のお兄さんのような。」

「花、それも違うと思う。」

京子の友人であるだけに花もなかなか突っ込みどころのある友人であると思う。ちなみに花の言う牛柄の人はたぶん黙っていれば格好いいのだと思う。私も中学のときに何度か遭遇した。でも、格好い

いというかへタレっぽい感じだった。

「何よ、千景。じゃああんたはどんな人がいいのよ。」

どんな、と言われ私は返答に困る。別に格好いい人を好きになるわけではないし、何で相手を好きになったのかなんてはつきり言っていない。

「私は強い人がいいな。」

柔らかい声色に振り返れば笑顔で佇む京子がいた。

「強い人？何、空手のチャンピオンみたいな人がいいの？」

「力じゃなくて心がだよ。」

そう言って京子が微笑み見つめる先にいたのは沢田くんだった。ああ、京子も沢田綱吉という人に惹かれた1人だったんだ。沢田くんを見つめる京子の表情は柔らかくて、すごく綺麗だった。そんな彼女をボーっと見つめていたら視界の端に白い物を見た。

「京子っ！」

咄嗟に体が動き、私は自分より背の低い京子を覆うように抱きしめた。肩に鈍い痛みが響く。

「っ！」

「ちかちゃん！」

飛んできたのは野球のボールだったらしい。目の前で泣きそうな顔をする京子に苦笑する。

「そんな顔しなくても大丈夫だよ。」

ぽんぽん、と京子の頭を撫でているとこちらに駆けってくる足音が聞こえた。

「悪い、大丈夫か？・・・って当たったの西崎？」

「そうですが？」

駆け寄ってきた男子生徒は申し訳なさそうな顔から一転笑顔になった。

「なら大丈夫だな。笹川さんに当たったと思ったから超焦った。」

「顔面か？顔面に一発入れて欲しいのか？」

男子生徒の肩を掴み、殴る準備をする。

「殴れ、千景！女に当てるなんて最低！」

「ちか、本当に大丈夫？」

「ちかちゃんにちゃんと謝って！」

3人の女子、しかもアイドルの京子にまで非難され、男子生徒もたじたじだ。

「ごめん、西崎さん。俺がボール取り損ねたんだ。」

謝罪の言葉を口にしたのは目の前で肩を掴んでいる男子生徒ではなく、その後ろから現れた沢田くんだった。

「そ、そうだ！全部沢田が悪い。」

「そんなわけあるか。」

私は宣言通り、男子生徒の顔面をグーで殴った。

「いってー！お前なー！」

「今のはおめえが悪いな。」

「謝ることも肝心だぞ、田中。」

あ、田中って言うんだこの人。武と獄寺くんに挟まれてしまった男子生徒、田中くんを見て、私は場違いなことを考える。

「それよりちかちゃん、肩大丈夫？」

京子がそつと触れた肩に強い痛みが走る。だが痛がるそぶりなど見せない。京子たちに心配かけたくないのだ。

「大丈夫。そろそろ授業終わるし戻ろう？」

そう言ってその場を去ろうとしたが痛みのある肩とは逆側の腕を掴まれ、私は動けなかった。驚いて振り返ると私の腕を掴んでいるのは沢田くんだった。

「ダメだよ。ちゃんと見てもらおう。俺が付き添うからみんなは戻ってて。」

「ちょっ！沢田くん!？」

強い力ではないけど有無を言わせぬ雰囲気で沢田くんは私の腕を引いて保健室に連れていく。戸惑いつつも私は沢田くんに従った。

「失礼します。」

「なんだボンゴレじゃねーか。俺は男はみねーぞ。」

「その台詞は医者としてどうなんだ!？・・・っ！か、怪我したのは俺じゃなくて西崎さん。」

保健医のシャル先生は男を見ないことで有名。女好きの変態なのだが何故か女子生徒からの人気は高かったりする。それよりもシャル先生と沢田くんが親しげなことに驚く。

「西崎く？・・・うおお！千景ちゃん!」

突然こちらに突進してきたシャル先生。私は反射的に保健室の扉を思いっきり閉めた。バンっ！というものすごい音が聞こえた。

「容赦ねー!」

「お、思わず・・・。」

恐る恐る扉を開けるとシャル先生が完全に伸びて倒れていた。

「「・・・・。」」

「えっと、中に入ろうか。」

「うん。」

沢田くんに促され、私たちはシャマル先生の体を踏みつけて・・・
じゃなかった、乗り越えて保健室の中に入った。

「じゃあ肩見せてくれる？」

「・・・沢田くん、大胆だね。」

「え？」

私の言った意味が分かっていない沢田くんに悪戯心を刺激されながら私は負傷している右肩の体操着を少しずらした。

「！！」

みるみる沢田くんの顔が赤くなっていく。まあ当たり前なんだけど、肩に湿布貼るにはブラの肩紐が見えちゃうんだよね。武とかだったら平然としてそうだけど沢田くんは見ると純情そうだし。

「沢田くん恥ずかしいよ。」

恥じるように少し俯きぎみになってみた。

「お、お、俺、そんなつもりじゃ!」

かなり動揺している沢田くん。面白すぎて笑いを堪えるのがつらい。

「・・・西崎さん、笑ってない? 笑ってるよね?」

「わ、笑ってないよ。」

「いや、声笑ってるし、肩震えてるから!」

どうやら誤魔化せていなかったらしい。そうとわかったらもう隠す必要はないので私は声を挙げて笑った。だって高校生にしてこの純情さは貴重だと思うよ。

「笑いすぎ!」

「ご、ごめん。でも、可愛くって。」

「それ褒め言葉じゃないからね!?」

「えゝ、褒めてるのに。」

「俺男だからね!?」

突っ込み続ける沢田くんには私は珍しいくらいケラケラ笑った。そんな私の様子を見て、彼の表情が少し変わった。

「どうしたの?」

「いや、よかった、と思って。」

「？」

意味がわからなくて、私は首を傾げた。

「西崎さん俺と話すときは笑ってくれないから嫌われてるのかと思
ってた。」

そんなつもりはなかったのだが元々そんなに笑わない私は自然と無
表情で接していたのだろう。言葉もきついつてよく言われるし。

「だからよかった、と思って。」

そう言って沢田くんはすごく嬉しそうに笑った。変な人。私はただ
面白かったから笑っただけなのに。変な人。そう思うけど、沢田く
んの笑顔を見えていたら私まで自然に笑顔になっていた。

1-2 放課後

学校帰り、私は真っ直ぐバイト先である叔母の家に向かう。

「ただいま、穂月さん。」

「おかえり、千景。」

につこり微笑む楠木穂月さんは私の自慢の叔母さんである。穂月さんはレトロな雰囲気のレストランを経営している。私はこの空気と穂月さんの淹れてくれるコーヒーが大好きだ。物心ついた時にはここにおいて、高校生になってからはバイトとして働いていて、最近では時々コーヒーを淹れさせてもらえるようになった。

「あんた毎日毎日ここにいるけど、他に行く場所ないの？」

寂しい子だね、穂月さんはそう言ってため息をつくけど、武が野球に夢中になって他のことが疎かなのと同じで私はコーヒーに夢中なのだ。全然寂しくなんてない。

「そう言えば、今日も来てるよ、あの坊や。」

そう言って穂月さんが指差した先にいたのは赤ちゃんなのに黒いスーツが妙に似合ってる最近の常連さん、リボーン。くん付けしたら呼捨てでいいと言われた。やっぱりちょっと不思議な赤ちゃん。

「こんにちは、リボーン。」

私は挨拶と共に私の淹れたエスプレッソを出す。リボーンはここに

来ると必ずエスプレッソを頼むのだ。最初は穂月さんの淹れるものしか飲んでくれなかったのだが最近は私の実力を認めてくれたのか飲んでくれて、しかもアドバイスまでしてくれる。

「千景か。・・・また上達したな。」

エスプレッソを一口すすり、リボーンはニヒルな笑みを浮かべて言った。リボーンがお世辞を言わないと知っている私はお褒めの言葉を素直に受け取り、嬉しさに頬を緩める。

「西崎さん!？」

びっくりして背筋を伸ばし、お店の入り口を見やればこちらにもびっくりしている沢田くんがお店に片足を踏み入れた状態のなんとも微妙な格好で立っていた。

「何してんだ、ダメツナ。さっさと入れ。」

「ダメツナ言うな!」

「沢田くん、リボーンと知り合い?」

「俺はツナの家庭教師なんだぞ。」

リボーン、赤ちゃんじゃないの?ますます不思議な赤ん坊だ、と心で呟きながらこちらに歩いてきた沢田くんを見やれば、彼は何故かスーツを着ていた。

「沢田くん、その格好・・・。」

「こ、これは・・・。」

「就活？」

「俺らまだ高2だよね!？」

沢田くんの見事な突っ込みに私は確かに、と納得する。でも、だつたらどうしてスーツ？しかも結構高そう。

「ツナは仕事の手伝いに来たんだぞ。まあ、バイトみたいなもんだ。」

スーツ着てバイト？しかもここで？色んな疑問は浮かんだがそこまですで私に関わるべきではないと思い、そ

うなんだ、と返すだけに留める。冷静なりボンの隣で沢田くんが安堵の息をついている辺り何かあるのだろうが、沢田くんがほっとしているなら、聞かなくてよかった、と思った。

その後、お店にやってきたのはやっぱり黒いスーツに身を包んだ人たち。沢田くんとりボンは彼らと向かい合い、何かを真剣に話し合っていた。真剣な顔をした沢田くんの横顔は私の知る幼さのある彼ではなく、男の人だった。ドキリ、としたのが三分の一。寂しいと感じたのが三分の二。まるで知らない人のようで、遠い人のよう。昔の古傷が疼いた気がした。

1-3 秘め事

君の笑った顔を見ると、何故か私は切なくなるの。ついこの間まで近くに感じていた君を今はとても遠い人のように感じる。あの人のように……。

喫茶店で沢田くんと遭遇した翌日、彼は私を避けるように目も合わそうとはしてくれなかった。たぶん、仕事中の自分を見られたのが嫌だったんだろう。だからって避けなくてもいいと思うのだが……。

「ちか、もう進路調査だした？」

ぼーっと沢田くんの後姿を追いかけていたら、美砂緒が声をかけてきた。慌てて意識を戻し、質問を繰り返すよう目だけで訴えれば、美砂緒は読みとってくれたのかため息をつく。

「だから、進路調査。」

「ああ。……まだ。美砂緒は？」

「まだ。まだ高2だよ？進路なんてわかんないよ。」

「逆。もう高2でしょ。来年は受験で卒業だよ。」

「先のこと言わないでよ。」

淡々と言えば、美砂緒はしゃがみ込んで机に突っ伏した。そんな彼女に聞こえないようにため息をつき、自分の将来を考える。みんな

口には出さないけど、色々考えているんだろう。・・・私は？私は何がしたいのだろう。コーヒーを淹れるのは好きだ。でもだからといってそれでどうしようという気はない。

「どうした、千景。元気ねーじゃん。」

「・・・武か。」

ちら、と声の主である武を見上げ、それがわかると興味が失せて、私は視線を再び遠くに飛ばす。別の人にこれをやるとものすごい怒られるけど、武はこれが私の考え込んでいる時の癖だと知っているので文句は言ってこない。

「山本くんは進路決まってる？やっぱりプロ目指すの？」

「んー。どうだろうな。」

美砂緒の質問に武ははっきりとは答えなかった。中学までなら確実に頷いていたであろう質問。私は不思議に思い、思考を中断して彼を見上げた。そこにいたのは曖昧な笑みを浮かべ、私の知らない顔をする武。17年間ずっと一緒にいたけど、こんな彼の顔は見たことがない。いや、ずっと一緒にいたというのは語弊がある。たぶん、私が知らない武は一杯いる。武の知らない私がいるように。

「伊藤は？」

「私はまだなの。」

頬を染めて話す美砂緒。そう言えば、この子は武が好きなんだったっけ。ということは私は邪魔者かな。そう思い、私は席を立てて廊

下に出る。昼休みはまだあるし、自販機で飲み物でも買おうかと1階の購買に向かえば、自販機の前には沢田くんがいた。珍しく獄寺くんはおらず、彼は一人だった。

「お金ないの？」

ぼーっと立っている沢田くんに尋ねれば彼はびっくり、と肩を揺らし、困った顔で私を振り返った。そんな顔をされては悪いことをしている気持ちになる。

「沢田くん、今日ずっと私のこと避けてない？」

「そ、そんなつもりじゃ……。」

「昨日のこと、私は別に問い詰めたりしないよ。」

「え？」

ポカン、とした沢田くんを一瞥し、自販機から一步退いた沢田くんに一言言って私はお金を投入する。なんとなくいちごミルクな気分だったのでそれにする。買い終わってもう一度沢田くんを見れば、彼は相変わらずポカン、としていて、その表情が愛らしくて、思わず笑ってしまった。

「な、何で笑うの！？」

「ごめん、なんか反応可愛くて。」

「前も言ったけどそれ嬉しくないからね！？」

突っ込みを入れる沢田くんはいつもの沢田くんでは私は笑いを止められない。ひとしきり笑い終わった頃には沢田くんは少々不貞腐れた様子で立っていた。

「いいんだよ、沢田くん。」

「え？」

「話したくないことを無理に説明する必要なんてないから。人間には黙秘権があるしね。」

「・・・壮大な話になったね。」

冷ややかに突っ込みを入れる沢田くんに苦笑し、しかしその笑みはすぐに解かれる。

「人にはさ、誰にだって話したくないことはあるよ。だからさ、無理に話さなくていいと思う。私も無理に聞いたりしない。」

「うん。ありがとう。」

ほっとしたように笑う沢田くんはやっぱ、遠くに感じた。

「でもさ、沢田くんには武や獄寺くんがいるんだから抱えきれなくなったら頼っていいと思うよ。2人ともきつと喜んで協力してくれるから。」

「うん。」

何故だろう。ついこの間まで近くに感じていたのに。笑った顔をみ

るとつられて笑顔になってしまったのに。今は何故か・・・切なくなる。遠くに感じるの。どうして？どうして私は、それを寂しく感じるの？

「戻ろうか。」

「西崎さん。」

「ん？」

振り返ると沢田くんは心配そうな真剣な表情で私に尋ねた。

「西崎さんには話せる人がいる？」

「・・・いいの。私は、誰にも話したくないから。」

それはいいって言ってるようなものなんだけど、でも私はそれでいいから。だって、誰にも話したくないの。

誰にも知られたくないの。……………3年前の恋のこと。

1-4 悩み

私は彼に出会ったことを後悔しているのだろうか。彼からの連絡が途絶えてもう2年。私は、まだ待ち続けるのだろうか。まだ、彼の事を想っているのだろうか。

沢田くんに投げやりの言葉を言ってしまったからというもの、彼は時折心配そうに私を見る。人の良さそうな沢田くんのことだ。あの言葉を聞いて私が何か抱えているのではないかと心配してくれているだろう。あの日言ったことは私の本心だし、撤回するつもりはない。誰かに話して困る話でもないのだけれど、誰にも何も言うて欲しくないから。だから言わないだけ。だから沢田くんが気にする必要なんてこれっぽっちもないのに。

「だから、ここに来てまでそんな顔しないでくれる？」

私は苦笑しながらカウンター席に座る沢田くん言う。そんな私に沢田くんは困ったような笑顔を返す。本当に、莫迦な人だと思う。友人に対してならまだしもただのクラスメイトの私をそんなに心配しなくてもいいのに。

沢田くんは最近よく、私のバイト先、つまりは叔母の穂月さんの喫茶店に顔をだすようになった。大抵はリボーンの仕事のお手伝いで、後は息抜きだ、と言って。よくわからないけど、このお店を気に入ってくれたのなら嬉しい。

「そんなに顔に出てた？」

「うん。」

真顔で頷けば、沢田くんは苦笑いを浮かべる。彼らしくない、綺麗な笑い方。何て言うか、作り物みたいな。沢田くんは隠し事ができないタイプだと思ってた。慌てる時も嬉しい時も隠せずにすぐに顔に出てたから。傍から見てる私でもわかるくらい。でも、最近の彼はよくこうやって誤魔化すような綺麗な笑いを浮かべる。まるで、感情を表に出さないようにしているみたいだ。

深くなっているこうとする思考に蓋をして、私は沢田くんのカプチーノを出す。リボーンのお仕事を手伝っている時は他の人と合わせてコーヒーを飲んでいるけど、沢田くんはコーヒーが苦手らしい。だから彼の好みに合わせた少し甘めのカプチーノを私は沢田くんが来ると必ず出す。沢田くんもそれ以外注文してこない。苦くてダメだという彼は同じ年の沢田綱吉くんらしくて少し安心する。・・・何で安心するんだろう？

「誰にも話さなくてつらくならないの？」

「へ？」

間拔けな声を上げてしまった。じっと見つめてくる沢田くんに少したじろぎながら彼の質問をもう一度頭の中で考える。えっと、たぶんこの間の誰にも話したくないという発言からの質問だね。やっぱり心配してくれていたのか、と思うと何故か少し泣きたくなった。

「・・・だって誰かに話したら褪せてしまいそうだから。」

きつとみんな口を揃えて言う。2年も連絡をよこさないような奴、待つだけ無駄だと。自分でその言葉を言うのはいい。でも、人に言われたら、ずっと大切にしてきたあの日々が、全部嘘に思えてしまいそうで、私の大切にしてきたもの全て偽りに変わってしまいそう

で。だったら話したくない。話さなくていいと思った。

「朝、目が覚めてわずかな希望を抱いて、一日の終わりに喪失感に襲われて。毎日がその繰り返し。」

期待しては裏切られ。でも希望は捨てられなくて。そんなことをもう3年も続けている。なんて、愚かしいのだろう。

「西崎さん？」

名前を呼ばれてはつとする。私は何を悠々と語っていたんだろう。唐突に話しただけに、沢田くんはきょとん、としている。ちょっと可愛いと思った。じゃなくて・・・！

「ごめん、変な話をして。忘れ・・・。」

「そう思う頃より前に戻りたいと思う？」

私の言葉を遮り、沢田くんが問いかける。どこか焦りを含んだ声と瞳に私は言葉に詰まる。

「・・・沢田くんは、戻りたいと思うの？なかったことにしたいと思うの？」

たぶん、今の質問は自分自身に問いかけたものなのだろう。問い返された沢田くんはとても罰が悪そうに私から目を反らした。まるで悪戯がみつかった子どものように。

「時々、思うんだ。リボーンに会わなければ、俺はずっとダメツナのままだったかもしれないけど、それなりに平穏な毎日を送れてい

たんじゃないかって。誰かを巻き込むことも傷つけることもなく、ただ平穩に。」

「。。。。」

遠い過去を懐かしむように沢田くんは呟くように話す。その瞳は何処か別の場所に向けられていた。もうその頃には戻れない。そう分かっていいるから、沢田くんはこんなにも悲しそうな顔をしているのだろう。

「例えば。。。。」

沈黙を破った私の声に沢田くんは肩をビクッと跳ねさせ、緩々と顔を上げた。とても不安そうな顔。思わず、大丈夫だよ、と抱きしめてやりたくなる。

「例えば、私の幼なじみの野球バカ。」

「それ、山本だよね。。。。」

いつもの突っ込みに苦笑いを浮かべる沢田くん。ちょっといつもの彼らしさを覗かせた沢田くんは私の頬が自然と緩む。

「うん、武。武は野球が大好きでしょ？夢はでっかくプロ野球選手。毎日毎日、それこそ耳にタコが出来るぐらい言ってた。。。。でも、最近はやらない。」

思い当たることがあるのか、沢田くんは気まずそうに目を反らした。

「どうしてなのかは知らないよ。でも、武はプロ野球選手の道を諦

めるくらい大事なものが出来たんだよ。」

「大事な物？」

「人はね、何かを得るためにはそれ相応の代価を支払うの。武は夢を捨ててでもそれを手に入れることを望んだんだよ。」

そう断言できる。武は昔から人気者だった。でも、彼の中で野球が一番で友達は二番だった。それでも彼は人気者だったし、別に薄情なわけでもなかった。でも、沢田くんと仲良くなってからは変わったの。前よりもずっと強くなった。何がって聞かれると困るけど、強くなったって思う。武は選んだ。野球でなく、沢田くんという友達を。

「武は何度やり直しても同じ道を選ぶよ。沢田くんだって、リボーンと出逢ってたくさんの物を得たでしょ？そして同時に捨てたの。」

そう、私も彼を待ち続けるために時間を捨てた。得る者があると信じて。

「うん。そうだね。」

ほんの少しだけ、彼の表情が和らいだように見えた。

「例えば、私の淹れたカップチーノが飲める、とかね。」

冗談めかしてそう言えば、沢田くんはいつもの笑顔で笑ってくれた。それが嬉しくて私もつられて笑みを浮かべる。

私は私が彼と出逢って何を得たのかまだわからない。待ち続ける

ことで何かを得られるのかもわからない。だけど・・・こうして笑ってくれる沢田くんと出逢うことが出来たのは彼のおかげの気がするから。どんなに苦しくても悲しくても、出会わなければよかったとは思いたくない。

1-5 再会

再会というのは突然なもので予想外の出来事まで連れてくる。

「千景！外に超イケメンのお兄さんがいるよ！」

「は？」

珍しく興奮している花には悪いがイケメンお兄さんとやらの興味の無い私は冷めた反応をとってしまった。

「さっきちょっとだけ見えたんだけど、金髪のイケメンだったよ。」

「ふん。花。」

「何？」

「帰っていい？」

帰り支度をすっかり終えている私は未だ有頂天な花に笑顔で言う。
イケメンがどうのこうのという話よりも早く帰ってコーヒーの練習をした方が有意義に決まっている。

私は花に早々に別れを告げ、学校を出た。校門の前にはそのイケメンを見に来たらしい女子で溢れかえっていた。その中に、見覚えのあるススキ色の髪が見えた気がしたのは気のせいだろうか。

バイトを始めてしばらくすると最近ではもう馴染みの顔となった人が現れた。

「いらっしやいませ、沢田くん。暇なの？」

「笑顔で毒吐かないで!？」

来店早々華麗な突っ込みを入れる沢田くん。リボーンが彼をいじつて楽しむ理由がわかる気がする。

「だってスーツじゃないし、仕事じゃないんでしょ？」

「半々かな？ただ、今日はそんな堅苦しいものじゃないからさ。」

そう言って入ってきた沢田くんの後ろからぞろぞろと見覚えのある顔とない顔とが入ってきた。

「って武!？」

「おう!そう言えばここ、お前の叔母さんの店だったな。」

にかつと笑う武に、かくん、と肩が下がる。あたしの驚きを返せつて言いたくなるくらい普通の反応。

「獄寺くんに了平さんに雲雀さんに知らない女の子・・・沢田くんどっかの不良のボスみたいだね。」

「うえ!？」

笑ってそう言えば、沢田くんは変な声を上げ、慌てふためく。・・・私、何か悪いこと言っちゃったのかな。

「君、おもしろいこと言うね。」

「?・・・えっと、ありがとうございます?」

雲雀さんに褒められ、わけのわからないままお礼を言う。

「10代目を困らせるんじゃないかねえ!」

「ちょっと、うるさい!お店の中で叫ばないで!」

煩い獄寺くんと私が睨みあっていると沢田くんは慌ててみんなに座るように指示をした。沢田くんに声をかけられたことで獄寺くんは一気に表情を明るくさせ、席についた。この沢田くん至上主義め。殴ってやりたい衝動にかられたがなんとか落ち着きを取り戻し、オーダーに向かう。

「可愛いお嬢さんは何にします?」

「え?」

私はまずメンバー唯一の女の子に声をかけた。

「お前はホストか!」

獄寺くんが突っ込みを入れてきたけど、そこは華麗に無視。私と彼はまさに水と油。合わないんだよね。

「お勧めはエスプレッソですけど、沢田くんのように苦い物が苦手でしたら甘めのカプチーノもお作りしますよ。」

「お子様ですみませんね！」

「そんなこと言ってないのに。」

「じゃあ甘めのカプチーノで。」

「はい、かしこまりました。」

沢田くんはいつものカプチーノ。獄寺くんと良平さんはエスプレッソ、雲雀さんは紅茶で武は特別オーダーの緑茶。

沢田くんと不思議メンバーは雲雀さんとクロームちゃんという女の子意外楽しそうに話している。私は全員分の飲み物を穂月さんと共に淹れ、彼等の元に運んで行く。近づいていくと金髪の髪が見えた。その後姿に私の思考は停止する。

そんなはずない……。

「ディーノさんもうとうとう結婚か。」

ディーノ。その名前に私の心臓が大きく跳ねる。

「羨ましいか、ツナ。」

結婚……？

食器が床に落ち、割れる音が店内に響き渡る。その音に全員の視線が私に集まる。彼も私を見る。

「千景……！」

「・・・。」

2年前、連絡の途切れた彼が、デイナーがそこにいた。・・・女の
人を連れて。

1—6 過去？

彼と私が出会ったのは私がまだ中学1年生の時だった。

もうだいたい学校生活にも慣れ、通学路をいつものように歩いて帰っていると目の前で躓いて転んだ人がいた。それは見事な転び方だった。

「・・・大丈夫ですか？」

声をかけるか一瞬悩んだが目の目でこう派手に転ばれては見て見ぬふりは出来ず、私は彼に近づいた。

「ああ、大丈夫だ。」

そう言って顔を上げた彼は凄く整った顔をした所謂美青年だった。日本人にはない雰囲気、金髪。どうみても彼は外国人。しかし彼の紡ぐ日本語は癖もなくとても綺麗だった。

「ちょっと聞きたいんだが、並中ってどこにあるんだ？ なかなか辿り着かなくてよ。」

「並中はすぐそこですけど。」

私の言葉に彼は目を瞬かせる。その顔は少し幼くて、可愛いと思った。私は彼にわかるように道を説明した。彼は日本語が堪能だったので日本語の説明だけで十分に理解してくれたので助かった。

「いやゝ、助かった。ありがとな。」

にっこり笑い、彼は歩き出した。と、同時に転んだ。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だ。」

たぶん顔面を強打したのだろう。彼は顔を抑えて答えた。そして立ち上がり、何故かまたすぐにこけた。

全く進まない。ある意味天才的なドジさ。私はため息をつき、彼に手を差し出した。

「並中まで送ります。」

「いや、大丈夫だって！」

「目の前で3回も頃ばれたら説得力がありません。」

もう一度ため息をつき、彼の腕を掴んで引っ張った。

「腕を掴んでてください。」

「なんか、お前の方が年上みたいだな。」

「あなたが頼りなさすぎるんです。」

「言ってくれるな。」

そう言って彼は笑った。いや、そこは怒るところだから。なんとも

独特な世界を持った人だ。呆れながら見上げると彼のおでこからは血が出ていた。

「血が出てる。」

私は背伸びをしてハンカチで血を拭う。

「あ、おい！汚れちまうぞ！」

「そもそもハンカチは汚れを取るものなんです。問題ありません。」

すり傷程度の怪我だったので血もすぐに止まりそうだった。そのことに安堵しつつ、私は鞆から絆創膏を取り出し、彼のおでこに張ってやった。

「これでよし。・・・！」

張り終わってから彼との距離があまりにも近いことに気がついた。男子とあまり接点のない私はこんなに男の人に近づいたことがない。頬に熱が集まるのを感じる。

「どうした？」

「な、何でもありません！」

慌てて彼から放れようとする腕を掴み逆に引き寄せられてしまった。

「！！！」

「照れてんだろ。可愛いな。」

彼は優しく笑い、私の頭をぽんぽん、と撫でた。

どこか冷めた所があり、しっかり者と思われている私は可愛いと言われたこともこんな風に頭を撫でられたこともなかった。余計に恥ずかしくなってさっきより頬が熱くなった。

「男をそんな顔で見るもんじゃねえぞ。」

「え？」

自分がどんな顔をしているのかなんてわからなくて、私は戸惑いの声を上げる。するとしばらくして彼の手が私の頭から放れた。それを少し寂しく思う。

「俺はディーノだ。お前の名前は？」

「・・・西崎千景。」

それが私とディーノの出逢いだった。そして、私が生まれて初めての恋をした日。

1-7 過去？

「よっ！千景。」

学校を出るとほぼ同時に声をかけられた。金髪の美青年。

「ディーノ。・・・暇なの？」

「一言目がそれか！？」

ディーノと出逢った中1の春から約2年。私は中3になっていた。

ディーノはあの出会いからというもののほぼ毎日のように並中に来て待ち伏せている。

口では辛辣のことを言うが私自身毎日のようにディーノに会えるのは正直嬉しい。

初めて出会ったあの日から私は彼に恋をしている。

初めて会ったあの日から、私は日ごとに彼を好きになる。まるで強力な磁石で吸い寄せられるかの如く彼に惹かれている。

「おっと、電話だ。」

「早く出なよ。」

「悪いな。」

一言私に詫びを入れ、彼は携帯を開いた。瞬間、いつも明るい笑顔を浮かべている彼の表情が曇る。

「・・・はい。・・・その話は既にお断りしているはずですが。」

ディーノは時折、こうして私にはわからないような難しい話をする。そんな彼を見ると自分がとてもなく子どもに見える。置いてけぼりをくらったような気持ちになる。

どんなに背伸びをしたってわたしはまだ14歳の女の子。ディーノからすれば私は子どもでしかないだろう。それがとても寂しい。

お願い。置いて行かないで。

「千景？」

「え？」

いつの間に電話を終えたのか、ディーノは不思議そうな顔で私を見つめ、指さした。彼が指差したのはディーノの腕を掴んでいる私の手。

「!!」

私は慌てて手を放す。無意識の行動とはいえ恥ずかしすぎる。頬に熱が集まるのを感じる。絶対に今、私の顔は真っ赤だ。そんな顔をディーノに見せるのは憚られて、私は彼よりも一歩前を歩きだした。

「千景、俺、イタリアに帰るよ。」

「・・・え？」

私は足を止め、彼を振り返った。彼の言葉を何度も、何度も頭の中で反芻する。

今、彼は帰ると言ったのだろうか。イタリアに、彼の故郷に帰ると言った？

「何、で？」

絞り出した声は微かに震えていた。一時帰国であればこの1年にだって何度もあった。でも、そうならそうとディーノは律儀に私に帰る日取りまで教えてくれる。

でも今回は違う。

こんなに真剣な表情をしたディーノを私は知らない。彼はきっと、もう日本には戻ってこない。出来ることなら冗談だと言って欲しい。

「元々、俺はイタリアの人間だし、そろそろ仕事をしないと。」

苦笑を浮かべ、ディーノは私に歩み寄り、大粒の雨を降らす私の瞳から涙を掬った。

「聡いな、千景。お前の想像通り、俺はきっと今までのように日本に来ることはないと思う。」

そんな風に笑って言わないでよ。涙で歪む視界だったがディーノが笑っているのは何となくわかった。何かを耐えた笑みだということも。

「好き。」

私の発した言葉に私の頬に触れていたディーノの手が震えたのを感じた。

「好き。」

あなたの事を何にも知らない私だけど、大人なあなたには不釣り合いなほど幼い私だけど、それでも好き。

放れたくないと、会えなくなるのは嫌だと、心が訴えてる。

それぐらいあなたが好き。

私を真っ直ぐに見つめてくれるあなたの瞳が、優しく包み込むように笑うあなたの笑顔が、時折意地悪なあなたが、大好きなの。

頬に触れているディーノの手に自分の手を重ねる。

「さよならなんて、嫌だよ・・・、ディーノ。」

重ねた手を握られ、私は彼に引き寄せられた。そして力強い腕に包まれた。愛しい人の腕の中。驚きで、涙が止まった。

「俺だって、お前が好きだ。」

耳元で囁かれた声は震えていた。しかしそれは何よりも甘い言葉だった。

「放れたくないし、放したくない。お前とずっと一緒にいたい。」

満たされて、幸せなはずなのに、私の瞳からは涙がまた溢れだしてきた。でもさっきの涙とは違う。悲しいんじゃない、これは嬉し涙。私の想いにあなたが答えてくれた。

「千景、いつになるかわからないけど、お前を迎えに来る。だから、それまで待っていてくれるか？」

私が泣き止み、落ち着いた頃、ディーンはそう言った。いつもは輝かしい笑顔を浮かべている顔が今は何処か不安げでそれさえも愛おしい。

彼がいつになるかわからないと言うのだ、本当にいつ迎えに来れるかわからないんだろう。

それでもいいと思った。それでもいい、彼を待っていようと思った。

「待ってる。私はここで、自分の夢を目指しながらディーンが迎えに来るのを待ってるよ。」

そう言って微笑めば、ディーンは一瞬泣きそうな顔をしてそして私に触れるだけのキスをくれた。

「出発までまだ少し時間がある。だから、別れがくるその日まで一杯一緒にいよう。」

その言葉通り、私たちは出来る限りの時間を一緒に過ごした。

今まで通り放課後は夜まで一緒に過ごしたし、休みの日は少し遠出

もした。遊園地も行ったし、水族館にも行った。私がお弁当を作ってピクニックにも行った。

離れている間も思い出が2人を支えてくれるようにと、互いを忘れないようにと。

そして、春から夏へと季節が変わろうとした頃、ディーノは日本を旅立った。

中学3年生の私は実った初恋に夢中だった。夢中で、そして信じて疑わなかった。

彼はきつと迎えに来てくれる。いつも自分達の心は繋がっている。

そう、勘違いしていた。

裏切られる日はすぐそこに迫っていたというのに。

ディーノが旅立ってしばらくはこまめに彼から連絡が来ていた。しかし、それも時が経つごとに減っていき、そして、季節が夏から秋に変わった頃、彼からの連絡は完全に途切れた。

1-8 決別

会いたかった人との再会は、私の予想を上回る最悪なものとなった。

ディーノと再会したからって私の日常が何か変わるのかと言ったら特に何も変わらない。いつもと同じ学校に行って、授業を受けて、友達と話して、帰って、寝て。今までと何も変わらない。日常というサイクルにたいして大きな変化は起きない。

いや、起きているか。

手に持った空のマグカップを見て、私は苦笑する。あの日から、私は穂月さんのお店に顔を出していない。ディーノと再会したあのお店に行くことができなかった。穂月さんは私の気持ちを汲んで、長いお休みをくれた。

「莫迦みたい。」

今まで何してたの？

あの人誰？

結婚って何？

・・・どうして、突然現れて私をかき乱すの！？

頭を廻る同じ言葉に苛立ち、私は持っていたマグカップを床に叩きつけた。床に落とされたマグカップは音を立てて割れ、破片が床に

散らばった。

悲しいのか、憎いのか、悔しいのか、わからない。全部かもしれない。頭がぐちゃぐちゃで、心もぐちゃぐちゃで、ただ、苦しい。でも涙は出ない。出るのは自嘲的な笑い。

「莫迦みたい。」

何度も同じ言葉を繰り返す。そうだ。私が莫迦だった。2年も彼を待っていた私が莫迦だったんだ。本当だったら連絡が来ない時点で忘れるべきだったのだから。なんて滑稽なんだろう。なんて、愚かなのだろう。

「西崎さん！」

学校の帰り道、聞き覚えのある声に振り返る。そこにいたのはディーノと再会して以来言葉を交わしていなかった沢田くんだった。正確には私が避けていたから話してなかったのだけど。左右には獄寺くんと武もいた。

「何？」

正直、彼らとは話したくなかった。だって、話題はディーノのことに決まってる。彼の話なんて聞きたくない。

「わかってんだろ。跳ね馬のことだ。」

「跳ね馬？」

「あ、ディーノさんのことな。」

聞き覚えのない呼び名に首をひねれば武が補足してくれた。ああ、でも結局ディーノのことか。私は彼等から視線を外し、小さなため息をつく。

「ディーノとは別に何でもないよ。ただ昔ちょっと話したことがあるだけ。」

「そんな相手に、お前はあんなに動揺すんのかよ。」

かわそうとする私の言葉を許さないというように獄寺くんは厳しい口調で言った。確かにそんなことで動揺するわけがないと自分でも分かっているのに彼を睨むことしか反撃が出来ない。

「西崎さんの誰にも話せない秘密ってディーノさんのこと？」

ああ、彼にはそんな話をしたんだっけ。

「そうだよ。毎日、毎日、彼からの連絡を待って、今日は連絡が来るんじゃないか、今日こそは校門の前から顔を表すんじゃないか、明日は、明後日は……。そうやって、ずっと待ってた。ずっとディーノを待ってた。」

でも、もう待ったって意味がない。彼にはもう別の人がいる。私は、ただ気まぐれで構われてただけ。それを本気と勝手に思って待ち続けて傷ついてるだけ。ああ、ばかばかしい。

「西崎さ……。」

「何かを失って何かを得るって言ったけど、あれ嘘かもね。私は何も得なかった。」

出会わなければよかったと、思うことだけはしなくなかった。でも・・・。

「こんなことなら、ディーノに出会わなければよかった。」

「それは違うよ!」

強い言葉に否定され、私は目を見開き、沢田くんを見た。

どうして、そんな顔するの？

今にも泣き出しそうな、悲しそうな顔。どうして君がそんな顔をするの？

「ディーノさんと出逢って嬉しかったことだってきつとたくさんあっただろ？」

「・・・うん。」

そうだ。全部が全部悲しい思い出なんかじゃない。ディーノと過ごした日々に私は確かに幸せを感じていた。ディーノにとって遊びでも、それでも私は確かに彼からたくさん幸せな気持ちもらった。

「そんでな、千景。俺たちからひとつ提案があるんだ。」

「ん?・・・ていうか、武のその頬はどうしたの?」

最近顔を合わせていないから今気がついたけど、武の頬には湿布がしてあった。野球の練習で怪我でもしたのだろうか。

「これか？ 気にすんな。」

にっこり笑って言う武に私はそれ以上の追及を諦めた。笑って気にするな、と言うときは絶対にその理由を教えてくれないから。私はため息をつき、頷いた。了承の意を示した私に武の表情は少し和らぐ。

「それで、提案って？」

「ディーノさんともう一度話をしてみない？」

「ディーノと？」

「跳ね馬はもうすぐ婚約パーティーをするんだ。その席には俺達も呼ばれてる。一般人のお前は本当だったら入れねえんだが、俺たちが機会を作ってやる。」

獄寺くんの説明は分かりやすかったがわからないこともたくさんあった。まずパーティーが開かれるということは2人がそれだけ上流階級の人ってことだ。そしてそれに沢田くんたちも呼ばれている。

君は、君たちはいったい何者なの？

「詳しいことは話せないんだけど、やっぱり、ちゃんと決着をつけた方がすっきりするんじゃないかと思って。」

私の心中を読みとったように沢田くんが補足をいれる。たぶん、何者なのかっていうのが、沢田くんが私や他の人に聞かれたくない事柄なんだろう。

「10代目からの提案だからな。俺達も出来る限りのことはする。」

「うん、ありがとう。・・・よろしくお願いします。」

私は彼等に頭を下げる。ディーンと会って何を話したらいいのかわからないけど、でも、終わりにしなくちゃいけないから。

1-9 さようなら

空が夕暮れから星空へと変わる頃、キャッパローネの屋敷では賑やかなパーティーが行われていた。

今晚は、ディーノと同盟ファミリーであるレイデローネファミリーのご令嬢との婚約パーティーが開催されているのだ。

ひたすら各ファミリーのボスに挨拶をして回っていたディーノは気付かれぬように小さくため息をつく。

「ため息つくと、幸せが逃げますよ。」

そう言って差し出されたグラスに驚いて顔を上げれば目の前にいたのはボンゴレ10代目候補の沢田綱吉だった。

ほんの数年前までマフィアは嫌だ、痛いのは嫌だと言っていたディーノの弟分はあつという間に成長を遂げ、今では彼をボンゴレ10代目とすることに異論を唱える者がいなくなってしまうくらい、綱吉はマフィア界で認められる人物へと成長していた。

「ツナ。・・・ありがとな。」

引きつった笑みを浮かべ、綱吉からのグラスを受け取る。現ボンゴレトップの9代目に代わり、今回のパーティーに出席している綱吉とその守護者たちとは先日いざこざを起こしてしまったのだ。それだけに顔を合わせづらかった。

「山本に殴られた傷、平気ですか？」

「痛みはあるがメイクでカモフラージュしてる。問題ないさ。」

先日のいざこざの際、ディーノは綱吉の雨の守護者山本武に思い切り殴られたのだ。普段は温厚な山本らしからぬ行動ではあったが大切な幼なじみを傷つけたのだ。手が出て当然とも思える。大人げなく殴り返してしまったし。

「ディーノさん。少し、お時間頂けますか？」

綱吉の言葉に首を傾げつつ、ディーノは頷いた。そして彼に連れられて言ったのはバルコニーへと続く窓の前だった。赤いカーテンが風に揺られている。その向こうで誰かの気配を感じた。

「ボンゴレ10代目の俺がここで護衛するわけにはいかないんで、うちの守護者を2人、護衛につけておきますね。」

晴れの守護者笹川了平。

雲の守護者雲雀恭弥。

了平はまだしも孤高の浮き雲と謳われる恭弥が護衛なるものを引きうけたことに家庭教師として彼の事を知っているディーノとしては驚きのあまり言葉が出ない。

「骸とクロームには幻覚でディーノさんがいるように仕立て上げるし、獄寺くんと山本がフォローに回ってくれてるんで何も心配ありません。」

「いや、意味わかんねえんだが。随分な手の込みようだが、なんだ

ってんだ？」

「俺たちのお姫様がお待ちですよってことです。」

それだけ言って、綱吉は人ごみの中へと消えて行った。

お姫様。

綱吉の言った言葉で思い当たる人物はただ一人。そんなはずはない
と思いつつ、ごくり、と喉がなる。

「早く行きなよ。彼女、ずっと待ってたんだからさ。」

「事情は沢田たちから聞いた。殴ってやりたいが山本がもう殴った
らしいからな。諦めてやる。」

「じゃあ、やっぱり……。」

「だから早く行きなつてば。いくら沢田綱吉や僕らでもそんなに時
間をやれないんだから。」

恭弥に一睨みされ、ディーノは苦笑を浮かべつつ、緊張した足取り
でカーテンをめくる。彼女に、この世で愛したたった一人の人にな
んと言っているのかわからない。誤魔化すべきなのか、正直な気持
ちを話すべきなのか、ディーノは心を決めかけていた。

「……ディーノ？」

懐かしい声に名前を呼ばれ、顔を上げ、ディーノは息を飲んだ。

「千景。」

大人しめな濃紺のドレスに最低限のアクセサリーをつけ、髪を結い上げた千景は先日見た彼女よりも数段に大人っぽく、月明かりが彼女の魅力を引き立てていた。

目の前に現れた彼に私の心臓は鼓動を早めた。沢田くんたちがここで待ってろって言うから待ってたけど、まさか本当にデイーノが来るとは思っていなかったから。

「久しぶり。」

私は自分を落ち着かせ、なんとか笑みを浮かべながらそう言った。実際はうまく笑えていないかもしれないけど、でも決めたから。自分の精一杯でデイーノの前に立とうって。

「どうして、ここに？」

「沢田くんたちが連れて来てくれたの。デイーノと話が出来るのは今日が最後だろうからって。」

「そうか。」

ああ、デイーノだ。私は唐突にそう思った。

月明かりで輝く綺麗な金髪。低めの優しい声。デイーノからの連絡が途絶えて時間が経てばたつほどに思った。

私は彼が好きなのだろうか、と。離れている時間が長ければ長いほど、私は自分の心がわからなくなった。

でも、今わかった。

私は今でも彼が好きだ。悔しいくらい、大好きだ。

「本当はね、恨み事一杯言ってるやろうと思ってきたの。だって、私の青春は全部ディーノに持っていかれちゃったんだもの。言いたくもなると思わない？」

「ああ、そうだな。」

「でもね、ディーノの顔見たらそんなのどうでもよくなっちゃった。」

だって、再び会ったあなたはこんなにも愛おしいから。会えて、こうして話せるだけで嬉しいから。

だからお願いよ。そんなに悲しそうな顔をしないで。

「何、言ってるんだ。責めろよ！お前に待ってるって言ったくせに、突然連絡を絶った俺を！結婚しようとしてる俺を！お前を縛り続けた俺を！」

「責めないよ。だってそれでも、私はディーノが好きだもの。昔よりずっと、好きだもの。」

呆氣にとられたような顔をしたディーノは泣きそうに顔を歪めた。

抱きしめてあげたくなった。抱きしめて、もういいよって言っ
てあげたい。泣かないでって言ってあげたい。でも、それはやっちゃい
けないから。

「本当は結婚おめでとうって言ってあげたかったんだけど、言えな
いや。」

「え?」

「ディーノのことまだ好きだから、おめでとうって言えない。・・・
ごめんね。」

あなたはもう、私の恋人のディーノじゃない。私が触れていい、デ
イーノじゃない。どんなにあなたが好きでもあなたはもう、他の女
(ひと)のものだから。

「ディーノ。」

未だ窓のすぐ側にいる彼に歩み寄り、そっとその頬に手を伸ばす。
触れるか触れないかのぎりぎりの所で私は手を止める。そんな私を
ディーノは不思議そうに見た。何で、触れないのか、彼の瞳はそう
問いかけていた。素直な彼に私は苦笑する。

「莫迦だな、ディーノ。あなたはもう、私の恋人じゃないんだよ。
人の物に勝手に触れるわけにいかないでしょう?」

「そう、だな。」

ディーノの瞳が哀しげに揺れる。それでも笑ってくれる。優しい人。
私のためにあなたは笑ってくれる。

「ねえ、ひとつだけ、聞いてもいい？」

「何だ？」

「私のこと、少しでも好きでいてくれてた？私のこと……。」

「好きだった！」

私の言葉を遮る強い言葉と共に、私は彼の腕の中に閉じ込められていた。

「好きだった。自分でも驚くくらいお前が好きだった。本当はお前を迎えに行きたかった。自分だけのものにしたかった！」

私を抱きしめるディーノの腕の力が強くなる。

ああ、もう十分だ。もう、その言葉だけで十分だ。

そっと、ディーノの胸を押し返す。私の拒絶にディーノは緩々と拘束を解く。放れていく温もりがこんなにも切ないなんて、思いもしなかった。

目頭が熱い。泣いてしまいそう。

でも、笑わなくちゃ。こんな私を愛してくれた彼に出来るのはそれくらいだから。

「千景、俺は……！！」

「ダメだよ、ディーン。その先は言っちゃダメ。だって、言ったらきっとお互いに今以上に苦しくなるだけだから。」

拳を握りしめ、唇を噛みしめ、ディーンは紡ごうとした言葉を押し殺す。そして顔を上げ、微笑んでくれた。

「そうだな。」

私も彼に笑顔を返す。愛しい人、どうかずっと笑っていて。どうか、幸せになって。

「もう、戻った方がいいよ。今日の主役でしょ？」

「ああ。」

「「さようなら、ディーン／千景。」」

1-10進むために

さようなら、愛しい人。誰よりも愛しています。

去っていく愛しい人の後姿が見えなくなるまで見つめていた。これが最後だから。しっかり目に焼きつけておきたかった。

バルコニーへと続く窓が閉じられた音を聞き、私はバルコニーの柵に手をのせ、空を見上げた。今日の月は特別綺麗に見えた。

「西崎さん。」

どれくらいそうしていたのだろうか。声をかけられ、私は我に返った。振り返れば沢田くんが立っていた。スーツを着た彼はやっぱり大人びていて、案外スーツが似合うのだと再認識する。

「沢田くん。」

私はちゃんと沢田くんに向き直り、深々と頭を下げた。

「ディーノと話をさせてくれてありがとう。すっきりした。」

「すっきりしたなら、顔上げてよ。真っ直ぐ俺を見てよ。」

「……。」

何で、わかつちやうのかな。

私が頭を下げた理由。顔を見られたくないからだって、何でわかつ

ちやうのかな。

頭の上から呆れたような小さなため息が聞こえた。そして腕を掴まれ、引っ張られたと思ったたら目の前に真っ暗な壁が出現した。抱きしめられているのだと気付くのに数秒かった。

「これなら顔見えないから。」

「。。。。」

「よく、頑張ったね。」

そう言って頭を撫でてくれた沢田くんの手がとても温かくて涙が溢れた。

本当は、ディーノを行かせたくなかった。

どうして、彼の隣に立つのが私じゃないんだろう。

どうして、私は彼の隣に立てないんだろう。

本当は抱きしめ続けて欲しかったのに。

その背に腕をまわして抱きしめたかったのに。

あの言葉の続きだって聞きたかったのに。

どうしてしちゃいけないことばかりなんだろう。

どうして私は、大好きな人を他の女の元へ送り出さなければいけない

いんだろう。

「頑張ったね。」

ディーンには言いたくても絶対に言えない奥底の本音を、口に出さなくても沢田くんは全部分かってくれてるみたいにな、私を褒めてくれた。

まだ苦しいし、悲しいけど、でも、ディーンが私を好きだったと言ってくれたから、沢田くんが頑張ったねって褒めてくれたから、私はこの涙が乾く頃には笑えると思う。笑って前に進めると思うんだ。

だから、今はまだ、泣くことを許して欲しい。

1-11 新たな予感

「獄寺くん、ディーノのこと、もう少し詳しく教えて欲しいんだけど。」

「諦めたんじゃないかったのかよ。」

獄寺くんの前に手製のエスプレッソを置き、私は彼の真正面に腰を下ろす。

私たちは今、穂月さんの喫茶店にいる。しばらくサボっていたせいでコーヒーを淹れる腕が大分落ちた私はただ今リハビリ中。獄寺くんはその実験台だ。本人には言わないけど。

「諦めるって言い方むかつくけど、ディーノのことはまあ、完全にじゃないけどふっきたよ。でも、ち

ゃんと納得するために、知っておきたい。何で、ディーノの結婚が決まったのか。」

真っ直ぐ獄寺くん見て言えば、彼は少し困った顔をして、私から視線を反らした。

「つか、何で俺に聞くんだよ。山本とかに聞きゃあいだろうが。」

「だって武説明下手じゃん。」

はつきり言って武は説明に向かない。なんか効果音で説明しようとするから全然わかんない。ていうか、武に説明されて理解できたこ

とってあんましない。それに・・・。

「それにたぶん、武は私にこの件にはもう関わって欲しくないと思うから。」

「確かにな。」

「それで沢田くんはどうかと思ったけど、あの人嘘つけなさそうだし。これ以上、彼に負担をかけるのは申し訳ないから。」

武もだけど、沢田くんは私を彼等の世界には巻き込みたくないと思っていた。だけど、私がディーノを好きだったから、忘れられないから、彼は私のために策を練ってくれた。沢田くんが色々な気をまわしてくれたおかげで私は彼等の世界がどんなものか未だ知らずにいられる。これ以上、気苦労をかけるわけにはいかない。

「それで了平さんに聞こうかと思ったんだけど、あの人も説明できる人じゃないじゃん？で、雲雀さんはどうかと思ったんだけどあの人と仲良くないし、危険因子に自ら近づきたくないし、で、クロームちゃんはどうかと思ったんだけど巻き込むの可哀そうだし。それでしょうがなく獄寺くんに説明してもらおうと思って。」

「そんなに俺が嫌いか。」

「まあまあ。で、説明して欲しいんだけど。」

もう一度今度は笑顔で頼めば、彼は再び大きなため息をついた。そして何かを考えるように目を閉じた。そして目を開けると同時にディーノの周りで起こっていたことを話してくれた。

「はね馬は大企業の社長な。多くの企業を従えるでかい会社の社長だ。んで、その会社と競うようにB社という会社が勢いを伸ばし始めた。まあはね馬の会社には大した影響はないかもしれないがあんまし素行がいい会社じゃなくてな。そこでトップであるはね馬の会社が提携を組もうと提案した。するとB社は自分の娘を娶ってくれたら提携を組むと言ってきた。・・・何で、自分の娘を娶らせたいかわかるか？」

「えっと、自分の会社との繋がりをより強くするため？」

「そうだ。娘を娶らせることで他の会社以上に強固な関係が作れるからな。これからの企業の安定を考えるならB社を潰すわけにはいかない。そして自分の下に着く奴らを守るためにはね馬に残された道はそれしかなかった。一言で言うなら政略結婚だな。」

想像以上に、ディーノの周りでは大変なことが起きていたらしい。

「はね馬、最初は断っていたらしい。」

「え？」

「自分には決めた相手がいるから、他の条件にしてくれて。色々、他の方法も考えたらしい。だが・・・。」

「ありがとう。」

「は？」

突然お礼を言った私に訳がわからない、といった様子で獄寺くんが

瞬きしながらこちらを見ていた。呆けたその顔が珍しくて私は思わず笑ってしまった。

「ディーノが本当は迎えに行きたかったって言うてくれたんだ。それが嘘じゃないってわかって嬉しかった。だから、ありがとう。」

「それでも、あいつが選んだのは仲間だ。」

「うん、それでいい。ディーノがどれだけ部下の人を大切に思っていたのか私は知ってる。だから、部下を守るっていう決断はディーノらしくて、良いと思う。」

「ちっ。お人好しな女だな。」

「獄寺くんだって十分お人好しでしょ。私の我儘に付き合ってくれてありがとう。エスプレッソのお代りいかが？今度は穂月さんに淹れてもらうからおいしいよ。」

「・・・お前が淹れたのでいい。」

照れ臭いのか、獄寺くんは私の方を見ずに立ちあがっている私にカップを差し出してきた。ぶっちゃけ獄寺くんは沢田くん至上主義過ぎてたまにうざいけど、悪い人ではないのだと思う。さすが沢田くんの友達だけあってお人よしだ。

「んじゃ、また明日な、西崎。」

「うん。今日はありがとう。」

獄寺くんは私が淹れなおしたエスプレッソを飲み終わると帰って行

った。私は彼が出ていったのを見送ると新しいエスプレッソを淹れ、カウンターに座る一人のお客の元へと運んだ。

真っ黒なスーツに身を包んだ赤ん坊の元へ。

「私が無理矢理頼んだのだから獄寺君を責めないでよ。リボーン。」

「何も言わねえぞ。お前、あの説明じゃ俺達の世界がどんなか全然わかんねえだろ。」

「わからん。それに、知らない方がいいんでしょう？」

「お前の為をいうならな。」

そう言ってカップに口をつける。文句を言ってこない辺り、味は悪くないようだ。それを確認してから私はリボーンの隣に腰かけた。

「相変わらず客のいない店だな。人気ねえんだな。」

「その人気のない店を気に入ってるのは何処の誰だ、この野郎。」

「それはさておきだ。」

あ、無視しやがった。この赤ん坊、腹立つな。

「そう怒んな。コーヒーの味は気に入ってるぞ。」

「あれ？私口に出してた？」

「俺は読心術が使えるからな。」

プライバシーの侵害だな。偉そうに言うリボーンに私は心の中で突っ込む。私はため息をつき、リボーンに視線を戻した。彼が何を言いに今日ここへ来たのかなんとなくわかつている。

「忠告に来たんでしょう？ 沢田くんたちに関する事で。」

「聡い奴は嫌いじゃねえぞ。」

「どーも。」

「関わるな、とは言わねえ。だがな、距離を間違えるな。間違っても、ツナを好きになるなよ。」

「何で私が沢田くんを好きになるのよ。」

「千景。」

静かな低い声で名前を呼ばれ、私はビクッと肩を竦める。名前を呼ばれただけなのに、身が強張るほどの威圧感を感じる。

「距離を間違えば、互いにつらくなるだけだ。ツナがお前を進んで巻き込もうとするとは思えねえが、まだ甘いからな。だからこそ、お前が距離を誤るな、千景。」

私が沢田くんを好きになるとか、そんなの想像も出来ないけど、リボーンの言葉は重くて、私はごくぐりと唾を飲む。

「・・・つまり、これ以上踏み込むってこと？」

「そういうことだ。一定の距離を保ち続ける。退くことがあっても踏み込むな。ツナを傷つけないならな。」

否定を許されない威圧感に私は頷くことしか出来なかった。距離の取り方をどうすればいいのか正直わからなかったけど、分かったことがひとつ。私が距離を誤れば傷つく人がいるのだということ。

「わかった。」

あの時、私はそう言ってリボンの言葉を理解したつもりだったが、たぶん何も分かってなかったんだ。距離を取るということがどういうことなのか。自分がどれだけ危うい位置に立っていたのか。

何ひとつ、わかっていなかった・・・。

1-11 新たな予感（後書き）

一応ここまで第一部完結です。ここまで読んでくださりありがとうございます。
ございます。

次回から第二部が始まります。一部はヒロインの過去の恋の話だったんですが、二部からはこれからの恋の話です。よろしければ引き続き次回のお話もお楽しみください。

2-1 羨望（前書き）

第二部のスタートです。

2-1 羨望

距離の取り方を間違えるな。そう言われた時にはもう、間違えていたのかもしれない。

「おはよう、西崎さん。昨日の宿題やってきた？」

「おはよう、沢田くん。見せないよ。」

挨拶と共に冷ややかに断った私に沢田くんは苦笑する。

半年前まで挨拶もろくに交わさなかった私と沢田くんだが、今ではこうして会話らしい会話もするようになった。そして春。私たちは高校3年生になった。とは言っても、2年から3年はクラス替えをせずに持ちあがるため、代わりばえはしないのだが。

「別に出来ない訳じゃないんだから自分でやりなさい。」

「はい。」

渋々ノートを取り出し、数学の宿題を始める沢田くんは苦笑しながら様子を見守る。いや、見張るって言った方が正しいかな？ ちなみにすぐに私に頼ろうとするのがもう1名いる。

「千景！宿題見せてくれ！」

「お前も自分でやれ！」

教室に入ってきて早々宿題を見せろと言う武に厳しく言い放つ。す

ると彼も渋々、と言った様子で沢田くんの隣に座り2人で宿題を始める。3年になってからというもののこの光景が当たり前になってきてしまった。

「「出来ました。」」

「よろしい。」

終わらせた2人の宿題を確認し、間違いがないかをチェックする。どうやら2人とも馬鹿ではないらしく、全問正解とはいかないがなかなかの出来栄えだった。最初っからやればいいのに。

「「こことここが違うけど、まあこんだけ出来てれば大丈夫なんじゃない？」」

「よかった。」

「な。千景は厳しいからな。」

「感謝しろ？宿題のチェックしてやってんだから感謝しろ？」

ノートで2人の頭を叩きながら言えば、何ともいえぬ苦笑いが返ってきた。

「ちかちゃん、お疲れ様。」

「ありがとう、京子。この2人には全く感謝の意志ってものがないんだよ。」

劳いの言葉をくれる京子の頭を撫でれば彼女はくすぐったそうに身

を振りながら愛らしい笑顔で笑った。本当に可愛いな、この子・・・
・そういえば、京子は沢田くんが好きなんだっけ。ふと、そんなことを思っただけは何やらノートと睨めっこを始めた沢田くんと京子を見比べた。2人が並んだら、愛らしいカップルなんだろうな。

「西崎さん、こここうだった？」

「ん？ ああ、そう。なんだ、やれば出来るじゃない。」

どうやら先ほど間違えた場所を解き直していたらしい。しかもちゃんと解けてるし。

「いつもこれなら成績も上がるだろうに。」

「それじゃあ俺がいつも怠けているみたいに聞こえるんだけど。」

「え、違うの？」

「本気で不思議そうに聞かないで!？」

「ツナ、いじられてんな。」

「山本、なんか楽しんでない？」

突っ込み連発の沢田くんを私と武は笑って流す。若干不貞腐れ気味の沢田くんだったけど最終的には笑っていた。

「ちかちゃん。」

「ん？」

「あの、今日の放課後空いてるかな？聞いて欲しいことがあるの。」

名前を呼ばれ振り返ればどこか不安げな様子で京子が見ていた。

「今日はバイトがあるんだ。」

「そっか。」

見るからにしょげる京子になんだかものすごく申し訳なくなってきた、私は考えた末、口を開く。

「バイトまでの間でよければ空いてるけど。いい？」

「うん。」

花が咲いたように微笑む京子に短い時間でもあげられてよかった、と思ひほつと息をつく。

「それで話って？」

穂月さんのカフェまで京子を連れてきた私は彼女に紅茶を出し、彼女の向かい側に腰掛けた。そういえば、沢田くんの不思議さを知ったのも、ディーノに再会したのも、リボーンに忠告を受けたのもここだったっけ。さて、今日は何があるのやら。話を聞く前の私は懐かしさに現を抜かしていたのだ。

「ツナくんのことなの。」

「沢田くん？」

「わ、私、ツナくんのことが好き。」

顔を真っ赤にして言う京子はとても愛らしくて、女の子だと思った。その表情を見ると、ディーノを好きだった自分を思い出す。恋に必死だった自分は今はもう、遠くに感じる。

「私が沢田くんと最近仲良くなりだしたのが気になる？」

「え、えっと……。うん。」

あまりにも素直で愛らしい彼女に私は思わず笑ってしまう。本当に沢田くんが好きなのだわかった。

「実はね、私の好きだった人沢田くんが知り合いで、その人との恋を終わらせるのに協力してもらったの。それで少し仲良くなっただけ。」

彼のおかげでディーノのことに關しては自分でもびっくりするくらいすっきりとしている。昔を思い出して心が温かくなることはあっても泣きそうになることはない。

「感謝はしてるけど、恋愛感情はないよ。だから頑張れ、京子。」

「ありがとう、ちかちゃん。」

ほっとしたように笑って京子は帰って行った。

「恋する乙女はかわいいねえ。」

「親父みたいだぞ、千景。」

「!!」

びっくりして振り返るとリボーンがカウンター席でエスプレッソを飲んでいた。何でここにいるのかしら。

「暇なの？リボーン。」

「お前、そんな接客態度だから客が減るんだぞ。」

「あたしが客減らしてるみたいな言い方やめてくれる？」

リボーンの言葉にイラッとしながらもふと浮かんだ疑問をそのまま彼に尋ねてみる。

「京子が沢田くんを好きになるのはいいの？」

「ああ。京子は全部知ってるからな。」

「それって、沢田くんの秘密のこと？」

「そうだぞ。」

「そっか。」

つまり、京子は私の知らない沢田くんのことを知ってるんだ。その

うえでリボーンからも関わることをよしとされてるわけだ。

羨ましいな。

・・・羨ましい？何で？

「千景。」

自分の思考にフリーズしているとリボーンに名前を呼ばれた。その表情は厳しい。でも、何故そんな顔をして名前を呼ばれたのかわからなくて、私は首を傾げる。

「お前・・・。」

「千景！もう仕事の時間だよ！」

「あ、ごめんなさい！ごめん、リボーン。」

穂月さんの怒声に私は慌てて店の奥に入った。

今思えば、あの時の私の変化にリボーンは気付いていたのかもしれない。

2-2 別れ道

京子に気持ちを打ち明けられた時、私の存在がどれだけ彼女に不安を与えていたのかと言うことがわかった。改めて、沢田くんとの距離の取り方を見直すべきだと思った。

・・・はずなのに。

「助かったよ。俺だけじゃ鍋の材料何にしているのかわからなかったからさ。」

「どう、いたしまして。」

何故か私は、休日に沢田くんとスーパーで買い物をしていた。

遡ること15分ほど前。親から買い物に行けと言われてスーパーに来たら、野菜コーナーで何やら悩んでいる様子のススキ色の髪の少年を見つけてしまったのだ。

「鍋って何入れるんだろ。トマト鍋ってあるし、トマト入れているのかな？あれ？トマト鍋って何入ってるんだろ。ピーマン？」

「何でピーマンチョイスしたの！？」

「あれ？西崎さん。」

「あ・・・。」

とまあ、思わず突っ込んだら何故か鍋の材料の買出しに付き合わされたわけだ。まさか沢田くん突っ込む日があるとは思わなかったな。だって沢田くんって突っ込みでしょ？何であたしに突っ込まれてんの？なんだかどつと疲れてしまって、私は沢田くんに気付かれないようにこっそりため息をついた。

「西崎さんの家は今日は何食べるの？」

「うちはハンバーグ。」

「俺の家は今日獄寺くんや山本を誘って鍋パーティなんだ。」

「いいね。」

嬉しそうに言う沢田くんを見ていたらなんだか自分の中にあつたもやもやした気持ちが晴れていくようだった。こういう時、沢田くんは不思議な人だなんて改めて思う。

「沢田くんって肉ばかり食べて野菜食べなさそうだね。」

「食べるよ！そんなに子どもじゃないから！」

「あはは。」

「信用してないでしょ！？」

沢田くんとのこうゆう会話はすごく好きだ。よくわからないけど、すごく安心する。沢田くんは不思議な人。笑ってくれるとほっとするし、傍にいと安心する。何で獄寺くんや武が君を大事に思うのか、何で、京子が君に惹かれたのか。今なら、なんとなくわかる気

がする。

「ありがとう、沢田くん。」

「何が？」

「ディーンのこと。沢田くんがいたからディーンに会って話ができたし、一杯泣いてすっきり出来た。だから、ありがとう。」

沢田くんにはたくさんお礼を言わなくちゃいけない。リボーンの話だと、ディーンは沢田くんに会いにちよくちよく日本を訪れていたらしい。つまり沢田くんがいたから私はディーンに会うことができたのだ。そして、沢田くんがいたから私はディーンに会ったことを後悔しなくて済んだ。

「ありがとう。」

ディーンに出会わせてくれて、後悔なく、別れさせてくれて。・・・
ありがとう。

私の突然のお礼を沢田くんは瞬きもせずじっと聞いていた。

「・・・、沢田くん。」

「ん？」

「沢田くんは手放さないでね。」

唐突な私の言葉に沢田くんは不思議そうに目を瞬いた。私は握る拳に力を入れ、声が震えないように気をつけながら言葉をつむいだ。

「大切な人が出来たら、放さないであげて。置いて行ったりしないで。」

京子を、置いて行かないであげて。そんな気持ちを込めて言った言葉に沢田くんは目を見張って聞いていた。

「変なこと言ってごめんね。じゃあ、また月曜日に。」

「・・・うん。またね。」

別れ道に来て、私は沢田くんの手を振った。沢田くんも笑って手を振ってくれた。互いに互いの道を進んでいく。交わることはないこの道は私と沢田くんのようにだと思った。

ねえ、沢田くん。私は少し、怖くなった。君の隣にいられたら、私の心は変わってしまう気がする。リボーンの忠告が私の頭に鳴り響く。距離を間違えるな、と。

2-3 自覚

私が気付かなかったただけで心は静かに、緩やかに変化していたんだ。それは自覚するとともに急速に形を変える。形を変えた想いは名前を持つ。

朝から降り続く雨は私を憂鬱にする。そもそも今日は調子が悪いのだ。頭ガンガンするし。だというのにこの空模様。気分が沈む理由はそれだけで十分だ。

「ちょっと千景。めっちゃ眉間に皺寄ってるんだけど。」

「いつも通りですけど。」

「どんないつも通りだ。」

花に呆れたようにため息をつかれる。眉間に皺を寄せている気なんてなかったのだが頭が痛いせいで自然と寄っていたらしい。

「朝から頭痛いの。あー、だめだ。やっぱ保健室行ってくる。」

席を立つと頭がクラッとして一瞬視界が歪んだ。

「ちょ、ちょっと大丈夫？」

ふらついた私に花が心配そうに声をかける。大丈夫、と伝えて私は教室を出た。偏頭痛というものだろう。雨の日は大抵頭が痛くなるし。少し寝れば大分よくなるはずだ。私はふらつきながら保健室まで向かった。そしてふと気付く。

「あの変態保健医がいたら面倒くさいな。」

鈍い痛みを訴える頭を抱え、あの変態保健医ことシャル先生を思い浮かべる。絶対何かしら絡んでくるはずだ。想像すると余計に頭が痛くなってきた。私は深々とため息をついた。意を決して保健室の扉を開くと予想に反して静かな保健室が私を出迎えてくれた。よくよく見れば扉に張り紙がしてあった。

『恋のハンティングに行ってくるぜ。』

それでいいのか、保健医！

心の中で突っ込みながらも、まあいいにこしたことはないと思いの息を吐く。

「失礼します。」

誰もいないけど一応挨拶をしてから入室した。上履きを脱いでベッドに上がり込む。頭が痛いせいか眠気はすぐにやってきた。

夢と現を彷徨い始めた頃、ゴロゴロ、という地を這うような音に私は目を覚ましてしまった。

止せばいいのに布団から出て、カーテンを開け、窓を見る。瞬間、窓から見える景色が青白く光り、再び地を這うようなあの恐ろしい音が聞こえてきた。雷が鳴っているかと理解するよりも早く、私はカーテンを閉め、頭まですっぽりと布団を被った。

光も音も通さぬように目を瞑り、耳を塞いだ。カーテンを閉め、窓

から背を向けているおかげで光は見えないが音だけはどうしても聞こえてきてしまう。音が鳴るたびに震えながら私は必死に眠ろうとした。しかし緊張状態のせいかさっきまであった眠気が何処かに行ってしまったらしい。私は声を押し殺して布団の中で震えているしかなかった。

ぽんぽん。

突然、布団の上から誰かに優しく体を叩かれた。まるで子どもを寝かしつけるようにぽんぽん、と優しく。恐る恐る顔を出すとそこには優しい表情で私を見ている沢田くんがいた。

一瞬、周りの音が消えた。ざわり、心の騒ぐ音だけが聞こえる。

「な、んで、ここに？」

「黒川が、西崎さんが保健室に行っちゃって聞いたから様子を見に来たんだ。」

「そう。」

会話を始めると同時に私の世界に音が戻ってきて、雷の音に私はビクリ、と体を震わせる。

「雷、怖いのか？」

「……………うん。」

弱さを見せるようで肯定することに戸惑ったけど、雷が鳴るたびにこうして体を震わせているのだ。誤魔化したところで強がりだと思

抜かれることは間違いない。悩んだ結果、私は肯定した。複雑な私の心境を知ってか知らずか、沢田くんは先ほどよりも優しい表情で笑った。

また、ざわり、と心が騒ぐ。

「そうだ。ちよっといい？」

「え？」

沢田くんは私の枕元に座ったかと思うと腕を引き、私を抱き寄せた。

「!？」

「こうすれば、俺の心音しか聞こえないでしょ？」

トクン、トクン、と心地よい音が耳元で鳴っている。私がこくり、と頷けば沢田くんは寒くないようにと布団で私をくるんだ。

「うちのチビ達がさ、やっぱり雷苦手で。こうしてやると安心するらしいんだ。」

「私はそのおチビさんたちと一緒にわね。」

「あはは。」

沢田くんの足の間に座らされ、抱き寄せられているこの状況はかなり恥ずかしくてドキドキするけど、それと同時に安心もする。乾いた笑みを浮かべる沢田くんは苦笑しながらも胸に耳を当て、彼の心音を聞く。不思議ともう、雷は怖くなかった。そのおかげか、再び

眠気がやってきた。

「いいよ、寝ても。眠るまでこうしてるから。」

暖かい手が頭を撫でてくれる感覚に酔いしれながら、私は目を閉じた。あんなに怖かったのに今はただ安らかだ。

いつからだろう、この手をディーノと重ねなくなったのは。

私は当初、沢田くんディーノの姿を重ねていた。明るい笑顔、人を惹きつける不思議な魅力、時折見せる大人びた表情……。その全てがディーノに似ていて、私は沢田くん彼を重ねてみていた。だから彼に対して感じる感情はディーノに向けた私の想いだった。

でも、いつからか、沢田くんの笑顔に、大人びた表情に、優しい笑みに、ディーノが重なることはなくなった。

私は沢田くんを沢田綱吉という一人の存在として見ていた。

まどろむ意識の中で私は何度もうしてかと自分に尋ね続けた。そして、意識が途切れる直前、理解する。

私は、沢田くんが好きなんだ。

想いは自覚するとともに急速に形を変え、そして明確なものになった。

2-4 警告

互いの道が交わることはない知っているはずなのに。どうして、好きになってしまったんだろう。

目が覚めた時、私は布団の中で横になって眠っていた。沢田くんが傍にいたなんて嘘みたいだ。でも、確かに彼はここにいて、私は彼の腕の中、心音を聞きながら、眠りに落ちたのだ。沢田くんを好きだと自覚して。

ぐっすり眠ったおかげか、頭痛は消えていた。布団から出て、大きく伸びをする。雨音がしないということは雨も止み、雷もおさまったのだろう。ほっと息をつき、私は教室に戻る。

「おかえり、千景。うん、顔色よくなったね。」

「ご心配おかけしました。」

わざとおどけた様にして言えば、全く、と花に呆れられた。授業が始まるまで花や京子たちと他愛もない話をして笑った。だけど、私の視線は時折、沢田くんの方へ向いていた。どうすることもできないこの想いを、私はどうやって消化すればいいんだろう。

放課後、すぐに帰る気にはなれなかった私は教室の窓から夕日の沈む景色を眺めていた。

「帰らねえのか？」

「武……。」

振り返った先にいたのは野球のユニホームを着た武だった。まだ、部活中のはずなのだが。

「さぼり？珍しいね。」

「千景に話があったからな。」

「・・・？」

武に改めてされる話が思いつかず、私は首を傾げる。そんな私に困ったように笑い、武は私に歩み寄ると真剣な表情で口を開いた。

「ツナを、好きになるなよ。」

「・・・。」

ドクン、と心臓が大きく鼓動を刻む。動揺を悟られぬように瞳は真っ直ぐ武を見据えた。

「リボーンと同じことを言うんだね。武も忠告に来たってわけだ。」

今思えば、リボーンはこうなることを分かっていたのかもしれない。私は、距離を間違えたのだろうか。

だから、沢田くんを好きになってしまったのだろうか。

「一回言われてんならこれは警告だ。・・・好きになってもお前がつらいだけだ。」

“好きになるな。ツナを傷つけないならな。”

「……私が沢田くんを好きになったら沢田くんを傷つけるのかな？」

「千景？」

視線を外し、現実味のない声で話す私を武が訝しげに呼ぶ。

「傷つけてしまう？」

優しいあの人を傷つけてしまう？

「……ああ。」

じゃあ、私の想いは知られちゃいけないね。

「千景、お前……。」

「ねえ、武。背中、貸して。」

私の言葉に、武は無言で背を向けた。その背に顔をうずめる。私の想いが誰かを傷つけるのならこんな想い失くしてしまえばいい。奥底にしまつて、出てこなければいい。

ほろり、と私の瞳から涙が零れた。

2-5 距離

距離を置くのは至極簡単なことだった。それは私と彼との関係の希薄さを表しているようで、とても寂しい。

「おはよう、千景。今日もぎりぎりだね。」

「早く来ることより睡眠を選びました。」

私は私に沢田くんと距離を置くと決めたあの日から登校する時間を変えた。遅く来れば、以前のように沢田くん勉強を教えることはない。それに私がいなければ京子が教えるだろうし、沢田くんと京子の距離を縮めるなら一石二鳥だ。

10分休みや昼休みは京子や花、美砂緒と共に女子話に話を咲かせていた。放課後のバイトもコーヒーの練習を理由にあまりカウntaxで無駄話をしないようにした。別に沢田くんを避けるつもりはないので話しかけられれば話すし、挨拶もする。

ただ少し、接点を減らしたただけだ。

それだけでも随分と沢田くんは遠くの人になってしまった。こうしてみると、私がどれだけ自分から沢田くんに関わりに行っていたのかがわかる。自分がどれだけ、沢田くんと希薄な関係にあったのかがわかる。クラスメイトよりは親しいかもしれない。でも、友達と呼べるほどの絆で結ばれている訳でもない。ただ、クラスが一緒に、私の好きだった人が沢田くんの知り合いだったというだけのことだ。

「しけた面してるな、千景。」

「うるさい、リボーン。」

エスプレッソを運びに行って言われた言葉にイラッとしながらも努めて冷静な声で返す。そんな私の態度に何が楽しいのかリボーンはニヤリ、と笑みを浮かべる。

「だからいったじゃねえか、距離を間違えるなって。」

まるで私の気持ちを見透かしているかのようなリボーンの物言いに、ぎりっと奥歯を噛みしめる。これ以上、この赤ん坊と話したくなくて、私は背を向けた。

カランコロン。

店の扉が開く音がして、私はそちらに顔を向ける。

「・・・いらっしやいませ。」

黒いスーツを着た沢田くんだった。私の姿を見ると少し困ったように笑った。

沢田くんは仕事で来る日はいつもどこか気まずそうに困ったように笑う。それを寂しいと感じるのはおかしいだろうか。

沢田くんとリボーンが4人掛けの席に座って間もなく、相手方の人が2人やってきた。こちらもやはりスーツ姿。見るからに怖そうな人たちばかり。彼等と沢田くんにどんな関わりがあるのか、私には想像もつかない。

「お待たせいたしました、コーヒーです。」

コーヒーを届けに行くと、沢田くんとリボンの姿がなかった。どこに行ったんだろう、と思いながら2人の男の前にコーヒーを置く。

「何だ、このコーヒー。味がねえぞ。」

一口飲んだ奥の男が顔を歪めて言った。でも穂月さんが作ったコーヒーに限ってそんなはずはない。それでも客がそう言っているのだから謝らなければいけない。

「申し訳ありません。お取り換えします。」

奥のコーヒーを取ろうと伸ばした腕を手前の男に掴まれた。

「おい、ねえちゃん。取り換えるだけで済むと思ってんのかよ。こんな不味いコーヒー普通に出しやがって。出すもん出してもらおうか。」

「痛っ！」

手首を捻じり上げられ、私は顔を歪める。コーヒーが不味いなんて絶対嘘だ。時折こうしていちやもんをつけてくる客がいるのだ。

「離してください！だいたい、本当に不味いんですか？ここのコーヒーはリボンだって認めてるんですよ！」

「ああ？客の言うことが嘘だって言いてえのか？」

「違うのか？」

「「!」」

いつの間にか帰ってきて向かい側の席に座っているリボーンに私も男も驚いてそちらを見る。無表情に男を見るリボーンは正直怖い。

「その手を離してください。」

男の腕に男性にしては少し細めの腕が伸び、つかんだ。顔を上げれば、普段は優しい笑みを浮かべている沢田くんが無表情で立っていた。

「離せ。」

沢田くんが掴んでいる手に力を入れると、男からうめき声が上がリ、私の手首から手が離れた。男を冷ややかに見ていた沢田くんの瞳が劣るような色に変わり、私を見た。

「大丈夫？」

そっと手を取られ、立ち上がる様促される。掴まれた手首が赤くなっている。結構強い力で掴まれていたらしい。それを見た沢田くんは眉間に皺を寄せ、私に背を向け、男に向き直った。

「一般人に手を出すな。」

思わず、目の前の沢田くんから顔を背けた。首を絞められているみたい息苦しい。

「交渉し直したな。おい、ツナ。俺は千景を手当てしてくるから取引終わらせておけよ。」

「わかった。」

「行くぞ、千景。」

先を歩くりボーンに私は無言でついて行った。奥にいた穂月さんに事情を説明し、私はリボーンとスタッフルームの中に入った。

「何、沈んだ顔してんだ。」

「・・・別に。」

「千景。」

幾分厳しめな声で名前を呼ばれ、顔をあげる。情けない顔をしているのだろう。リボーンは少し驚いた顔で私を見ていた。

「私がわざわざ距離を取らなくても、沢田くんと私には決定的な距離があるじゃない。」

私の知らない沢田くんの秘密。それがあゝ限り私と沢田くんの距離は縮まらない。いや、知ったところできつと縮まない。だって・・・。

「沢田くんは私との間に線引きをしてる。」

私を一般人と呼んだ。友達でも、クラスメイトでもなく、一般人と。沢田くんと私を別のものと線引きをした。

それは秘密を知っても知らなくてもきつと変わらない現実。

2-6 消したい想い

私は二度と、想うだけの恋なんてしない。実ることがないのなら、その恋は諦める。ずるいかもしれない。でも、立ち止まらないためにも無理矢理にでも前に進むしかないのだ。

「ちか、最近合コンに行ってるって本当？」

昼休みの屋上。久しぶりに美砂緒と2人でお昼を食べている。

「行ってるよ。いい出会いがあればいいと思って。」

何でもないことのように答えれば美砂緒は訝しげな顔で私をじっと見てきた。中学からずっと一緒にいる美砂緒には私の今の行動は不可解でしようがないのだろう。

「自暴自棄に見える？」

「・・・うん。」

言わずらそうに頷く美砂緒に私は苦笑する。らしくない行動は随分この友人に心配をかけてしまったらしい。

「そうだね、自暴自棄気味かも。」

自嘲気味な笑いがこぼれる。ここしばらく花に誘われるがまま、合コンに参加した。でも、いい出会いなどあるわけもなく、私は営業スマイルを振りまいて疲れて帰るのだ。それでも少しでも沢田くんの事を忘れられるなら、あの悲しい気持ちを忘れられるなら、それ

でよかったから。

「もし気分転換で合コンに行くなら、やめよう？それよりもさ、私と遊ぼうよ！ね！」

京子とはまた違う愛らしい笑顔に私の頬も自然と緩む。

「ありがとう。」

合コンに行くか行かないかは別として、美砂緒の気持ちは嬉しかった。

結局、その日も花に連れられて合コンに行った。そこに見覚えのある顔があつて、私は目を反らした。今日の合コン相手は黒曜高校だったらしい。

そう、何故か骸さんがいたのだ。

骸さんに会ったのはディーノの婚約パーティーで一度だけ。独特の雰囲気と髪型だったので覚えている。絶対こういう所にくるタイプじゃないのに。

「は、花、私、今日はもう帰ってもいいかな？」

「は？来たばかりじゃん。」

「えっと、あれだ！頭が痛くなってきたの！うん。てことで、じゃあね！」

「ちょっと、千景！」

花の制止も聞かず、私は挨拶もそこそこに鞆を持って店を飛び出した。

「びっくりした。何であのパイナップルがいるのよ。」

「誰がパイナップルですか。」

「!!」

振り返ると骸さんが笑顔で立っていらっしやった。

「・・・こんばんは、骸さん。」

「こんばんは、お姫様。」

冷や汗をだらだらと流しながら、私は骸さんに捕獲された。

「あの、骸さんは何であんな所にいたんですか？」

「おや、可笑しいですか？」

「物凄く。」

即答すれば、骸さんは楽しそうにクツクツ、と奇妙な笑い声を上げて笑った。絶対変だよ、この人。ていうか、怖いよ、この人。

「僕はたまたま君が参加すると聞いたので参加しただけですよ。」

「何で？」

「ボンゴレのお姫様に何かあったら困りますからね。」

よくわからない理由に私が首を傾げると、君はまだ知らなくていい、と穏やかな笑顔で言われた。そんな顔も出来るのか、としばしその笑顔に見惚れる。

「骸さんはそうやって笑うとすごく素敵ですね。」

私の言葉にしばらく呆けた顔をした後、骸さんは噴き出すように笑った。

「何で笑うんですかー!？」

結構いいことを言ったと思っただけに笑われると変なことを言ってしまったのかと若干焦る。そんな私に彼はいえいえ、と首を振った。

「お褒めに預かり光栄ですよ。」

芝居がかった口調に私は少々不貞腐れる。なんだか遊ばれてるみたいだ。そういうのは沢田くんの役割なのに。・・・何ですぐ沢田くんに繋げちゃうのかな。自然とため息が零れる。

「どうしました？ 沢田綱吉と何かあったんですか？」

「・・・何も。どうせ私は部外者ですから。」

拗ねたような口調に自分でも呆れてしまう。拗ねるような事じゃない。沢田くんはきつと私を巻き込まないために線引きをしたただけだから、拗ねることじゃない。

「知りたいですか？ 沢田綱吉の秘密を。」

「・・・知りたいです。でも、知っても何も変わらないと思うから、知らなくていいです。」

そう、何も変わらない。いや、知ってしまった方が彼は遠ざかってしまうのかもしれない。だって・・・。

「だって、知ったとしても沢田くんは私を置いて行ってしまうと思うから。」

一瞬驚いた顔をした骸さんはさっきと同じ穏やかな笑みを浮かべた。

「置いて行かれるのは、嫌ですか？」

「・・・はい。」

置いて行かれるのは、もう嫌だ。ディーノの時のように待ち続けるのはもう嫌だ。あんなに寂しくて、苦しい思いをするのはもう嫌だ。だって、結ばれないという結末を私は知っているから。今度はもう、待てないと思う。

待つのは、もう嫌だ。

置いて行かれるのは、もう嫌だ。

俯いた私の頭を撫でる骸さんの手は思っていたよりもずっと、暖かった。

2-7 小さな幸せ

一人で帰れると言った私を骸さんは送ると言ってついてきた。骸さんといるとまるで自分が子どもみたいでちよつと悔しくなる。骸さんに気付かれないようにこっそりため息をつくつと、前方に人影が現れた。ていうか、沢田君だし。ていうか、沢田くんの家の前だし。

「あれ？西崎さん・・・と、骸？」

「やあ、こんばんは。沢田綱吉。」

「・・・こんばんは、沢田くん。」

にっこり、沢田くんに笑顔で挨拶して私は勢いよく骸さんの制服の袖を引っ張った。降りてきた骸さんの耳に小声で訴える。

「ちよつと、何で沢田くんと遭遇してんのよ！絶対わざとここに来るように誘導してきたでしょ、あんた！」

「何のことですか？僕は君についてきただけですよ。」

胡散臭い笑みを浮かべる骸さんに本気で殺意が芽生えた。頭撫でくれた時のあの優しさは何処にいったんだ、このパイナップルめ！

「何で骸が西崎さんと一緒にいるんだよ。」

合コンで会いました。なんて口が裂けても言えない。仮にも好きな人に合コンに行っていたなんて知られたくない。

「たまたまですよ。たまたま。」

骸さんの曖昧な答えに沢田くんは眉を寄せたけど、それ以上は追及しなかった。たぶん、骸さんがそれ以上は説明しないと分かったんだろう。

「にしても丁度いい所で会いましたね。千景のことは沢田綱吉に任せるとしようか。僕は用事があるんでね。」

私と沢田くんの返事も聞かずに骸さんは踵を返して帰って行った。丁度いいも何も、人が上の空なのをいいことにお前がここまで連れてきたんだよ！骸さんの背中に向かって心の中で罵倒し続けた。

「何で、あいつまで……。」

「え？」

「いや、何でもない。あ、送るよ。」

こっちでしょ、と言って歩き出す沢田くんには私は一瞬何を言われたのかわからず呆けていたが、すぐに我に返り、彼の背中を追いかけた。

「い、いいよ！だって沢田くん、用事があって家を出てきたんでしょ？ 私なら一人で帰れるから！」

「コンビニに行こうと思ったただけだから。それに、西崎さんとうして話すのは久しぶりだし。」

「……ありがとう。」

お願いだから、そんな笑顔でそんなこと言わないで欲しい。沢田くんにとっては何でもないであろうその言葉にも私の心は高鳴ってしまった、素っ気ないお礼しか言えなかった。

「あの日はごめんね。」

「え?」

「俺の仕事相手に絡まれた日。怖かったでしょ?」

「・・・ああ。大丈夫だよ。今までにも何度かあったもの。腕捕まれたのは初めてだったけど。」

それよりも、沢田くんに線引きされたことのほうがずっと悲しくて、つらかった。踏み込んだら全部失くしてしまいそうで怖かった。

「ごめん。」

「沢田くんが謝ることじゃないよ。」

「でも・・・。」

「沢田くんの知り合いだろうが、仕事相手だろうが、ああいう行動を起こしたのはあの人たちなんだから沢田くんが謝ることじゃないよ。人のしたことにまで責任感じる必要はないよ。それに、沢田くんは助けてくれたじゃない。」

戸惑いの表情を浮かべる沢田くんには私は苦笑する。この人はどれだけ優しいのだろう。被害を受けた私が気にするなと言っているのだ。

だから気にする必要なんて、責任を感じる必要なんてないのに。

「ばかだな、沢田くん。そんな顔されたお礼言うのが戸惑われちゃうよ。」

「俺、そんなに変な顔してた？」

「うん、とっても。」

真顔で大きく頷けば、沢田くんは苦笑した。まだ少し元気がないけど、いつもの沢田くんの笑みだ。

「助けてくれてありがとう、沢田くん。」

「どういたしまして。」

少し照れた様子で私のお礼を受け止める沢田くんに自然、私の頬も緩む。必死に遠ざけようとしていたのに、遠ざかっていたのに。久しぶりに話す沢田くんとの会話はとても楽しくて、笑う沢田くんを見るのは幸せだった。たとえこれに今だけであっても、いや、今だけだからこそ、この幸せな時を心に刻みつけたい。

2-8 喧嘩

私のことなんて放っておいてくれればいいのに。どうして、放っておいてくれないの。

「何で、お前がここにいるんだぴょん！」

「犬、煩い。」

まったりティータイムを楽しむ中、騒がしい声が部屋に響く。

ここは黒曜ランド。骸さんのねぐらの様な場所だ。

そこにはクロームもいて、あと犬と千種って人とも知り合った。犬は語尾に「ぴょん」を付ける変人で、千種は「面倒くさい」が口癖。変人って言ったら怒られそうだから心の中だけにとどめておこう。

「何でって、遊びにきたんだよ。」

最近此処へ来ることが日課となりつつある私は犬にっこり微笑んだ。その笑顔が気に入らなかったのか犬は余計に騒ぎだした。

「ボンゴレの人間がここにくんな！」

「……。」

だから、ボンゴレってなんだよ、と心で突っ込みつつ口には出さない。何度か聞いたことのある「ボンゴレ」という言葉。たぶん沢田

くんに関連しているのだと思う。沢田くんに関係しているのならば、私には関係ないと思う。

「犬、千景は違うよ。」

「うるへー！お前は出しやばるんじゃねえぴょん！」

クロームに向かって暴言を吐いた犬に私は持っていたカップを投げつけた。カップは犬の頬スレスレを通り、奥の壁に当たって砕けた。

「ダメでしょ、犬。女の子に暴言吐いちゃ。」

「す、すいません。」

「大人しくこっちで座ってなさい。」

にっこり笑って言えば、犬は素直に私の隣に腰を下ろした。

「ごめんね、クローム。またカップ割っちゃった。」

「気にしないで。」

「謝るなら最初から投げないで欲しいんだけど。」

千種の冷静な突っ込みに私は頬を膨らませる。彼等というのはとても楽しい。並高のみんななどの会話の中には必ず沢田くんが出てくるけど、ここではあまり話題に上がることはない。だから楽しかったし、安らいだ。

「楽しそうな所申し訳ないですがね、千景。お迎えですよ。」

「え？」

やっと顔を出したと思ったら骸さんは後ろに沢田くんを連れていた。状況が理解できず私は目を瞬かせる。何で、沢田くんがいるの？そんな意味を込めて骸さんを見上げると、彼は少し困ったように笑った。いつも人を小馬鹿にした態度をとる骸さんにしては珍しい反応に私は余計に戸惑う。

「帰るよ、西崎さん。」

「え？」

腕を引っ張られ、私はクロームたちにろくな挨拶も出来ないまま黒曜ランドをあとにすることになってしまった。そんなことよりも、なんだか沢田くん……。

「……怒ってる？」

ぴたり。沢田くんの足が止まった。掴まれた手はそのままに、沢田くんがこちらを振り返る。眉間に皺を寄せ、厳しい顔つきで私を見る。その瞳の冷たさに私はびくり、と身を縮ませた。

「何で、黒曜ランドになんて行ってるの？」

「たの、しいから……。」

そんな答えでいいのかわからないけど、私は緊張しながらそう言葉を紡いだ。

「あそこは結構危ない場所だって知ってるよね？」

沢田くんの言葉に私はこくり、と頷く。黒曜ランドは不良のたまり場として有名だ。今は骸さんたちがあそこを使っているからそう危なくはないらしいのだが、それでも安全とは言えない場所だ。

「それに、何で骸に会いに行くのさ。」

「どうして？ 骸さん、いい人だよ。」

「骸がいい人っていうのは語弊があると思うよ。」

「何で、そんなこと言うの？」

どうして冷たい瞳で、声で、そんなことを言うの。どうして、私の知らない顔をするの。

「巻き込まれたらどうするつもり？」

巻き込まれる？ 何に？ わからない。

「お願いだから、もう骸に会いに行くのはやめてよ。」

何にも教えてくれないくせに、何でそんなこと言うの？

「やだよ。折角仲良くなったんだもん。これから行く。」

「西崎さん！」

「何でダメなの！？ 私が何処で何をしようが沢田くんには関係ない

じゃない!」

「関係なくないよ! 危ないと分かってるのに、友達を行かせる訳にはいかないだろ!」

声を張り上げれば、沢田くんはそれ以上の声で返してきた。彼は私を友達と言う。

何も知らない私は友達? 君に一般人と線引きされた私は友達と言えるの?

「どうして、放っておいてくれないの・・・?」

呟くような小さな言葉。沢田くんにはもしかしたら聞こえていないかもしれない。目頭が熱くなって、泣きそうだ。

「私の事は放っておいてよ! 必死なの! 忘れるために、前に進むために必死なの! それにはあの場所が一番心地いいのよ!」

沢田くんの傍にいと心が苦しいと悲鳴を上げる。優しさに触れる度、笑いかけられる度、それが私だけに向けられたものではないと知ると悲しくて、悲しくて、頭がおかしくなりそう。だからもう、放っておいて欲しい。

「友達だって言うなら、そう振舞うようにするから! だからもう放っておいてよ!」

硬直する沢田くんの手を振り払い、私は駆けだした。息が切れて苦しくても、止まらずに走った。そのうち、足がもつれて私は派手に転んだ。起き上った時初めて、頬に温かいものが伝っていることに

気がついた。どうやら私は泣いているらしい。

何で？何かが悲しかったのだろうか。わからない。

ああ、でも、そうだ。悲しいのかもしれない。だって、胸がこんなにも痛い。

2-9 願い

沢田くんと言い争いになってから、私はずっと沢田くんを避けている。なのに、彼が話しかけようとするから段々と形振り構ってられなくなつて、沢田くんが近づきそうな気配を感じたら教室から逃げ出すなどあからさまな態度をとるようになっていた。

「千景、ツナと何かあったのか？」

珍しく家に遊びに来た武は首を傾げて尋ねてきた。沢田くんの話などしたくない私は顔を顰める。

「別に何もない。沢田くんと関わらない方が武だって嬉しいでしょ。」

拗ねた子どものように顔を背ける私に武の苦笑する声が聞こえてきた。その声はまるで、何をそんなに頑なになっているのか、と言われているような気がした。

頑なに、なっているのだろうか。

これ以上好きにならないように、これ以上自分を傷つけないように、頑なに沢田くんを拒んでいるのだろうか。これが正しい距離なのだろうか。どれだけ頭で考えても答えが見つからなくて、私はため息をついた。

「ツナも、最近ため息が多いんだ。」

「・・・そう。」

そりゃ、友達だと思ってた人からこんなにあからさまな拒絶を受けたら誰だってへこむよね。でも、今の私にはどうしようもない。

「俺はさ、莫迦だからよくわかんねえけど、今の状態が苦しいなら、苦しくなくなる方法を探せばいいと思うぜ。」

「何それ。」

苦しいから沢田くんを避けているんじゃないか。

・・・じゃあどうして、今も苦しいままなのだろう。

「千景、前に俺が言ったことは忘れていいぞ。」

「沢田くんを好きになるなって？」

「おう。忘れろ。そんで、思うままにしろ。」

お前はいつも溜めこみすぎだ。そう言って、武は帰ってしまった。好きにしろ、と言われた私はただ戸惑うばかりだ。

私は、何がしたいの？ どうしたいの？

別に、沢田くんを避けたいわけじゃない。前みたいになんか話したい。いつもの笑顔で笑って欲しい。

好きでいたい。

たとえば、立つ場所が隣じゃなくてもいい、一般人だっていい、それ

でも、一緒にいることを許して欲しい。好きでいたい。

こんな我儘な私だけど、それでも願うなら、沢田くんにも私を好きになって欲しい。隣に立って、手を繋いで歩きたい。ずっと、ずっと・・・。

2-10告白

自分の心を偽るのはもう嫌だから。だから私は、はじめをつけようと思う。

「京子、ちょっと話したいことがあるんだけど、いいかな？」

なるべく普段通りを心がけながら私は京子に声をかけた。

断って欲しい。

話を聞いて欲しい。

二つの想いがせめぎ合う。これから彼女に言わねばならないことを考えると私の胸中は複雑だ。

「うん。いいよ。」

ふわり、と微笑まれると余計に胸が苦しくなる。私が話すのは、大事な友達である京子を傷つけることだ。それでも、もう心を偽るのをやめると決めたから。私は京子に話さなければならぬ。

場所を変え、私は京子と向き直った。昼休みの屋上は込み合うが、放課後に屋上に上がってくる人なんて告白する人ぐらいだ。だから私たちの傍には誰もいない。

「どうしたの、ちかちゃん。とっても難しい顔してる。」

ごめんね、京子。無邪気な彼女の笑みを見ていると胸が苦しくなる。

逃げ出したくてたまらなくなる。

「ごめん、京子。」

「ちかちゃん？」

「私、沢田くんが好きだよ。」

私の告白に京子は大きな目を見開き、瞬きせずに私を見た。そして暫くすると悲しげに微笑んだ。

「そんな気がしてたんだ、最近。」

ツナくんのこと、あからさまに避けていたから。そう言って京子は黙った。唇を震わせて困ったように微笑んだ。

どうして、そんなに泣きそうな顔をするのか、私にはわからなかった。確かに、私の告白は京子を傷つけるものだけど、沢田くんの心を私が手に入れたわけではない。どちらかと言えば、京子の方が沢田くんと近い場所にいるのに。

「私の方こそごめんね。ちかちゃんがツナくんを避けてたのって、多少なりとも私のこと思ってくれたからでもあるんでしょう？」

素直に頷いていいものか悩んだが、京子の瞳は全てお見通しだ、と言われているような気がして、私はこくり、と頷いた。すると彼女は再び、ごめんね、と謝った。

「私がちかちゃんを追い詰めてたね。」

「違う！違うよ。私が、弱かったの。だから、余計に傷つけたの。」

沢田くんのこと、京子の事も。

「どうして、人の想いって上手くいかないんだろうね。」

「・・・。」

朗らかに微笑む京子には先ほどの泣きそうな表情は何処にもなかった。

「ちかちゃん。ツナくんと、早く仲直りしてあげてね。」

そう言って京子は綺麗な、綺麗な笑顔で微笑んだ。私は言葉を紡げずに、黙って頷いた。

2-11好き

避ける癖がついてしまったのか、京子に背中を押してもらったというのに、私は未だに沢田くんに声をかけることが出来なかった。

「はあ。あたしってこんなに意気地なしかったっけ……。」

「しょうがないよ。元に戻るのは難しいもの。」

すっかり私の逃げ場と化している屋上でため息をついている私を京子が話を聞いてくれる。

「ちかちゃん、そんなに気を張ることないよ。急ぐことないんだから。」

頑張れ、そう言って彼女は笑う。京子だって沢田くんの事が好きなのに。私たちは言わばライバル関係だ。それでも京子は応援してくれる。その胸中はきつと複雑だろう。だけどそれを表に出すことはない。京子にいらぬ気を使わせてしまっていることが心苦しい。

「随分暗い顔をしていますね、千景。」

「うわっ！パイナップル！じゃなくて、骸さん。」

帰り道、突然現れた骸さんに私は物凄く驚いた。思わず言い間違えるくらい。

「千景、殴っていいですか？」

笑顔で言われて私は必死に首を横に振った。マジで殴られそうだった。それでそれは避けたい。骸さんに殴られたら死んじやいそう。雲雀さん並に強いって聞いたことがあるもの。

「全く、君は。人が心配しいて来て上げたというのに。ま、思ったよりは元気そうだなによりです。」

そう言って彼は優しく微笑むと私の頭を優しく撫でた。子ども扱いする彼に恥ずかしさ半分、嬉しさ半分で大人しく撫でられていた。その手がびたり、と止まり彼は両手を上げた。

「ただ慰めていただけですよ。」

骸さんの発言の意味がわからず私は首を捻る。すると後ろからそれに答えが返って来た。

「何も言っていない。」

その声に私の方がびくり、と肩を揺らした。聞きたくて、聞きたくてしょうがなかった声。でも、どうして彼がここにいるのだろう。

「じゃあそんな目で睨まないでくれませんか？ 空気も刺々しいですし。」

「……………」

沢田くんは無言で近づいてくると私の腕を引き、自分の背に庇うよ

うに立った。

「沢田くん？」

状況が読み込めない私は目を瞬かせながら事の成り行きを見守るばかりだ。沢田くんと骸さんの間には火花が散っているように見えなくもない。それだけ空気がピリピリしているのだ。

「で、何でお前がここにいるんだ？」

「千景に会いに來ただけですよ。」

小首を傾げてにつこり笑う骸さんは一般女子が見たら惚れ惚れしそうで、私には黒い笑顔にしか見えない。そして私からは表情が見えない沢田くんも笑っているような気がした。骸さんと同じ真っ黒な笑顔で。ブラック沢田くんなんて見たいような見たくないような・・・。

「そもそも僕が彼女とどうしようと思わないと思うのですが？」

「お前、わざと言ってるだろ。」

苦々しい沢田くんの声に骸さんは楽しそうに笑った。

「残念ながら騎士のお出ましのようなので僕は帰りますよ。それでは、千景。また遊びに来てくださいね。」

「あ、はい。」

沢田くん越しになつこり微笑まれ、私は思わず頷いていた。それと

同時に沢田くんがため息を吐いたのが聞こえた。そう言えば、黒曜には遊びに行くなって言われていたんだった。

「あ、あの沢田くん。」

恐る恐る声をかけると沢田くんが私の腕を掴んだままくるり、とこちらを向いた。

「……………」

怒っているのでは、と思っていた沢田くんはとても穏やかで優しい笑みを浮かべていた。思わず、声を失ってしまうくらい、私のその表情にくぎ付けになっていた。

「やっと捕まえた。」

嬉しそうに。とても嬉しそうに言う沢田くんに私の瞳からほろり、と涙が一筋流れた。

「にし……。」

「ごめん、なさい。」

震える声で最初に出た言葉は謝罪だった。本当はもっとたくさん言いたいことがあったけど、でも、私の口から出たのはただ一言、ごめんなさい、だけだった。

「どうして、謝るの？」

「だって……………」

だって、私は君を傷つけた。たくさん、たくさん、傷つけたから。

「酷いこと、一杯言った。それに、一杯避けた。きっと、一杯傷つけた。」

「でも、それと同じくらい俺も西崎さんのこと傷つけていたと思う。だから、俺もごめん。」

優しい笑みを浮かべながら、沢田くんは私の涙を拭ってくれた。頬に触れた沢田くんの手が温かくて余計に涙が溢れた。やっぱり私、沢田くんが好き。好き。好き。どうしようもないくらい、溢れてしまいそうなくらい、好きで、好きで堪らない。

「骸の所に行って欲しくなかったのは、骸に西崎さんを取られるんじゃないかって心配だったからなんだ。」

「…………え？」

それって、どういう意味…？

私が涙を流したままの瞳で見上げると沢田くんは困ったように微笑んでいた。

「今は、ここまでしか言えないんだ。でも、西崎さんは誰にも渡さないから。」

それは限りなく告白に近い言葉。だけど、沢田くんはそれ以上の言葉を紡ぐことはなかった。沢田くんが切なげに目を細めて笑うから、私は頬に触れる彼の手に自分の手を重ねた。

「十分、だよ。その言葉だけで、十分。」

沢田くんは今言えるぎりぎりの言葉で私に伝えてくれている。それだけで十分だから。

「ありがとう。」

沢田くんが言葉で紡ぐことが出来ないということは、私も私の気持ちを言葉にしてはいけない。だから、私は返事のつもりで、彼の頬に口付けをした。顔を放すと沢田くんは顔を真っ赤にしていた。その顔が沢田くんらしさを沸騰とさせるものだから、私は頬を緩めていた。だから私はもう一度同じ言葉を紡いだ。

「ありがとう。」

2-12 覚悟（前書き）

随分更新が遅くなってしまいました。すみません。
今回は3話連続で更新させていただきます。

2-12 覚悟

「おい、千景。ツナと何があった。」

「……………」

相変わらず鋭い。

目の前に座るリボンから私はあからさまに視線を外し、沈黙を貫いた。だって、リボンの目を見たら心の中全部見られそうなんだもん。いや、この時点で沢田くんとの間に何かあったってバレバレなんですけどね。それよりも私が気になるのは…。

「あのさ、何で応接室？」

そう。私とリボンがいるのは応接室。元雲雀さんの巣。

「ここは人が寄ってこないからだよ。」

「!?!」

突然、背後から声が聞こえて私は思い切り肩を揺らしてびびる。まさかと思いながら振りかえると雲雀さんがドアに背を預けて立っていた。

「ひ、ひ、ひ、雲雀さん？」

「そうだけど。他に誰に見えるの？」

いや、うん。その極悪顔は雲雀さんで間違いないですね。いや、でも何で卒業したはずの雲雀さんがここに？

「雲雀さん、留年したんですか？」

「千景。いい度胸してるね。」

「じよ、冗談です！」

トンファーを構える雲雀さんに私は両手を上げて降参の意を示した。

「ちっ。」

うわー。今、この人舌打ちしたよ。何、私のことそんなに咬み殺したかったのか？全然嬉しくないんですけど。

「よく考えてみる、千景。並盛大好きの雲雀だぞ。いて当たり前だろう。」

「ああ、確かに。」

「それで納得する君は結構ずれてると思うよ。」

どうでもよさそうにため息をついた雲雀さんは何故か私の隣に腰を下ろした。思わず少し雲雀さんから放れた。それに気付いた雲雀さんがむっとしてこちらを見る。

「何で放れるの？」

「え……。あ！そう言えばリボーン、何の話をしてたんだっけ？」

どう返答しても咬み殺されそうな気がして、私は無理矢理リボーンに話題を振った。

「ツナと何があったのか。」

失敗した。それもすっごく危うい話だった。何でリボーンに話振っちゃったんだろ。いや、だって他に話題振る人いないし。何、この雁字搦め。新手のいじめか！？私はため息をつき、覚悟を決めた。姿勢を正し、リボーンを真っ直ぐ見る。

「私、沢田くんが好き。でも別に沢田くんとどうにかなったわけではない。以上！」

「千景がツナを好きななんてことは分かった。問題はそこじゃねえ。」

厳しいリボーンの口調に私の掌に嫌な汗が滲む。

「ツナがお前に想いを伝えたか、だ。」

「言っていない。」

そこは即答できた。だって、本当にはっきりした気持ちは聞いていない。あくまで告白に限りなく近い言葉だけだ。キスをしたのは私から。でもあれは頬だし、デイナーなんて挨拶だって言うてよくしてきた。

「それでも、お前らの間に進展はあったんだろ。」

「仲直り、しただけ。」

汗でべたつく掌を私はぎゅう、と握り込んだ。そうしなければリボーンからの威圧感に耐えられそうになかったから。暫くの沈黙の後、リボーンがため息をつくのが聞こえた。

「千景。前言撤回だ。お前、もうツナに近づくな。」

「な!？」

あまりにも理不尽な言葉に私は顔を上げ、リボーンの瞳を真っ直ぐに睨みつける。

「何で、交友関係までリボーンに口出しされなきゃならないの？」

「君が無知な草食動物だからだよ。」

いつのまにか距離を詰めていた雲雀さんが、私の顎を掬い、私の顔を雲雀さんに向けさせた。雲雀さんの言っている意味がわからなくて、私は探るように雲雀さんの目を見据えた。でも雲雀さんの瞳は何処までも穏やかで、何の感情も読みとれない。

「君、沢田綱吉が何者か知ってる？」

「……………」

雲雀さんが何を指しているのかわかっている。たぶん、沢田くんのお秘密のことを言っているのだ。だから知ってるか、と問われれば私は知らない。沢田くんが何者で、何を抱えているのか、何も知らない。でも、ここで屈したくなかった。

「優しくて、寂しがりやで、でも、本当はすごく強い人です。」

「僕が言ってるのはそういうことじゃないよ。」

「わかってます。でも、私にはそれが沢田くんの全てだし、それだけ分かっていれば十分です。」

そうだ。今まで、彼の秘密にばかり気を取られていたけど、沢田くんがどんな人間か、それだけ分かっていれば後はどうでもいい。例えば沢田くんが実は犯罪者だった、とか言われたって私の中の沢田くんは沢田くんではかない。だったらもう、彼が何者だって構わない。

真っ直ぐに雲雀さんを見据えて言う私に彼は少し驚いた様子だった。そして雲雀さんは何処か悲しげに、いや、残念そうに微笑んだ。そして私の頬を撫で、彼は言った。

「それだけじゃ、沢田綱吉の傍にはいられないよ。」

その言葉は静かに、でも重く私の心に衝撃を与えた。

どういう、こと？

「千景、あいつは卒業と同時に日本を発つ。」

私は目を見張った。

この赤ん坊は、今、何て言った…？

「あいつはお前を連れて行かないだろう。」

渡り廊下の途中。空を見上げ、ぼーっとしていると遠くから足音が聞こえてきた。

「西崎さん！よかった、やっと見つけたよ。」

「沢田くん……………」

「応接室に呼ばれてたから何かあったのか心配してたんだ。」

「ちょっと、リボーンと話してた。」

リボーンの名前が出ると沢田くんの表情が強張った。

「その後雲雀さんが来て、一緒にお茶飲んだ。」

にっこり笑って言えば、想像したのか沢田くんは青ざめていた。うん。普通に考えたらかなり怖い状況だね。

「大丈夫だった？」

「……………うん。」

心配そうに尋ねてくる沢田くんには私は笑って頷いた。彼はほっと息をついて微笑んだ。

「帰ろう。」

差し出された手に、私はそつと自分の手を重ねた。そうしたら沢田くんが強く握り返してくれた。

“ あいつはお前を連れて行かない。”

あの言葉を思い出し、私は思わず握る手に力を入れた。

“ 別れの覚悟を済ませておけ。”

「西崎さん？」

さよならをする覚悟が、私に出来るだろうか……………。

2-13 無知

「沢田くんの卒業と同時にみんなでイタリアへ行くって本当ですか？」

私の唐突な質問に骸さんは目を見開く。その表情がリボーンの言ったことが事実であるとありありと証明していた。

「…………アルコバレーノから聞いたのですか？」

黙って頷けば、骸さんはため息をつき、私の頭を撫でた。

「骸さん、私はどうすればいいですか？」

私は間違いなく、一步沢田くんたちの世界へ近づいた。沢田くんと思いが通じ合って、浮かれていたけど、私と沢田くんの前には問題が山積みだ。彼が誰であろうと構わない。でも、そのことが問題で私が彼に置いて行かれてしまうなら、知りたい。それとも、知ったところで沢田くんは私を連れて行ってはくれないのだろうか。

「どうしたって、沢田くんは私を連れて行ってはくれませんか？」

「連れて行かないと思いますよ。」

即答され、私は縋るように見上げていた骸さんの顔から視線を外し、俯いた。ああ、やっぱり、と思ったけど、それでも悲しくて。置いて行かれるなら、何故彼は私にあんなことを言ったのだろうか。それとも、あれは私の自惚れだったのだろうか。

「沢田綱吉は君を守れると自信を持って言えるようになるまで君を連れて行かないでしょう。……君が大切なんですよ。」

顎を掬われ、強制的に顔を上げさせられた私の瞳に優しげに、寂しげに微笑む骸さんが映った。

「千景、少々厳しいことを言ってもいいですか？」

「……はい。」

「君は無知だ。無知な君は沢田綱吉の重荷にしかない……君が彼に今できるのは、突き放すことだけですよ。」

そう言って骸さんは私を残し、行ってしまった。彼がいなくなり、一人にきりになると、私の瞳から自然と涙が零れ落ちた。私は座っていたソファから滑り落ち、地べたにぺたり、と座り込んだ。

“君が無知な草食動物だからだよ。”

雲雀さんの言った言葉の意味が今、わかった。それだけでは傍にいられないといった意味も。

確かに、無理だ。彼の人間性を知っているだけでは、私は沢田くんの傍にはいられない。支えにはならない。それどころか、ただのお荷物だ。日本で彼の迎えを待つことさえ、彼の負担になるだろう。だって、ディーノがそうだった。私が何も知らずに彼を求めたから、待ち続けたから、ディーノはとても苦しんだ。

私の存在は、沢田くんを傷つけることしかできない。だからリボーンは私にストップをかけようとしたんだ。意地悪でなく、私と沢田

くんのために……………!!

あまりにも無知な自分が悔しくて、悲しくて、涙が止まらない。どうして、うまくいかないのだろう。どうして、好きになってしまったんだろう。どうして、どうして……………。

同じ言葉が何度も頭を廻り、私は涙を止められない。

「千景。」

名前を呼ばれ、私は緩々と顔を上げた。彼のそんなに優しい声を聞いたのは久しぶりな気がする。

「……………り、ボー……ン。」

嗚咽を飲みこみながら目の前の赤ん坊を見れば、その大きな瞳に優しい色を宿しながら彼は私の頭を撫でた。

「だから散々忠告したんだ。」

言葉は咎めるもののなのに、その声色はどこか優しい。たぶん、私が理解し、自分のしなければならぬことを理解したからだろう。リボンだって私にこんな決断をさせないために私に厳しいことを言ってくれていたのだ。でも……………。

「それでも、私は……、沢田くんを、好きになったと、思う……………」

「そうか。卒業までまだ時間がある。思い出を心に刻め。」

その後、リボンは私が泣き止むまでずっと傍で頭を撫で続けてく

れた。

無知であることは幸せだったのか、それとも罪だったのだろうか……。

2-14 銀世界

自分がしなくてはいけないことを自覚した私だけど、決して沢田くんから放れようとはしなかった。リボンもそこは了承してくれている。だから何も言わない。私が秘めている決意など知らない沢田くんはいつもと変わらず優しい。

「わー、雪が降って来たよ！」

帰り支度をしている頃、京子が窓の外を見て、声を上げた。自分の席を離れ、窓を見てみると確かに真っ白な粒が空から降って来ている。季節が冬を迎えているのだと、改めて実感する。窓を開け、手を伸ばせば、純白の粒が私の手に触れる。

「…………冷たい。」

「ちかちゃん？」

「雪、久しぶりに見たね。」

拳を握り、それを教室の中へと引っ込めると、私は隣で不思議そうに見上げてくる京子に微笑んで見せた。そうだね、と言って京子は再び外の景色に目を移す。そうして2人で雪空を見上げていたら、ガラッ、と扉の開く音がした。

「西崎さん、京子ちゃん。お待ちせ。」

ふにやり、と微笑む沢田くんの後ろから武と獄寺くんも入って来た。今日は武の部活がないので久しぶりにみんなで帰ることになってい

た。

時が進むに連れて、私が沢田くんたちの輪の中に入るのは当たり前になりつつあった。以前は別々だった帰りも今は一緒に帰ることの方が多いし、沢田くんの家にだって、もう数え切れないほど行った。

それでも私は彼等の輪の中に本当の意味では入れないのだろう。

「もうすぐ冬休みだな。」

「武はどうせ毎日部活でしょ？」

「ははっ。まあな。」

「野球バカめ。」

「獄寺くん、それ、山本にとっては褒め言葉なんじゃないかな。」

「もうあだ名みたいになってるよね。」

他愛のない話をしながらみんなで歩く。話題は冬休みからその前にある期末試験、それ以外にも昨日のテレビの話や今日学校であった出来事など。話題は尽きない。そしてそのまま別れ道へと差し掛かる。

獄寺くんと京子ちゃんが左、私と武は右、沢田くんは真っ直ぐ。でも今日、私は沢田くんと同じ道に行く。少しでも長く、沢田くんと一緒にいたいから。

「じゃあね、みんな。」

「バイバイ、ツナくん、ちかちゃん。」

「失礼します、10代目。」

「じゃあなく。」

手を振り合い、私たちは別れる。私は胸の前で拳を握り、みんなの後姿を見送った。きつともうすぐ、永遠に見れなくなる。

「西崎さん？」

「行こうか、沢田くん。」

微笑み歩き出せば、沢田くんは頷き私に歩調を合わせて歩いてくれる。

「寒くなったね。」

「すっかり冬って感じ。」

冬の寒さですっかり冷えきった手をこすり合わせ、息を吹きかける。ほんの一瞬温まるがすぐに冷えてしまう。そうしていたらすつと手が差し出された。顔を上げれば照れ臭いのか、寒さのせいなのか、顔を赤くした沢田くんがいた。その手の意味がわからず首を捻ると苦笑した沢田くんが私の手を握った。

「こうしたら少しは温かいでしょ？」

「……………ありがとう。」

その笑顔はずるいと思う。そんな優しい笑顔、ずるい。恥ずかしくて、私は視線を反らす。沢田くんは一瞬で私の心を掴んでしまう。翻弄されるばかりで少々悔しい。

「冬休みが開けたら、最後の学期か。」

ふと呟かれた言葉に私は思わず足を止めてしまう。突然歩みを止めた私を沢田くんが不思議そうに見下ろす。

「どうしたの？」

穏やかに笑って問いかけてくる沢田くんには私は一拍遅れてなんでもない、と返事をした。そして私たちは再び歩き出した。

何で、そんなに穏やかな顔で先の話をするの？

私は沢田くんに気付かれないように唇を噛んだ。そうしなければ泣いてしまいそうだったから。いつか、来てしまうこの手を放さなければいけない日が怖くてしょうがない。

「冬休み、2人で何処かに出かけようか。」

照れてはにかむ沢田くんの笑顔を見ると余計にこの手を放したくないと思う。わかっている。別れが来ることは変えられない。

ならばせめて、もっと時間がゆっくり流れてくれればいい。

冬休みなど来なければいい。

この銀世界の中、私と沢田くんの2人きり、時を忘れて過ごしていければいいのに……………。

無理だと分かっているでもそう願わずにはられない私は、愚かなのだろうか……………。

2-15 別れ

少しずつ近づく別れの時を、私は受け止めあぐねていた。好きなのに……。大好きなのに、どうして離れなければならないんだろう。どうして、一緒にはいられないのだろう……。

冬休みには2人で出かけて、クリスマスと一緒に過ごして、一緒に初詣に行つて……。限られた時を私はなるべく沢田くんと過ごした。毎日に幸せを感じれば感じるほど、日々が過ぎていくことが悲しかった。

そしてとうとう、高校生活最後の学期に入った。1月一杯は学校に通う私たち3年生だが、2月からは自由登校に入る。私は東京の大学に進学が決まっている。そして沢田くんは……。

「沢田くんは、卒業したらどうするの？」

知っていたけど、沢田くんから聞きたくて、私は尋ねた。今にも泣きそうになってしまう自分を奮い立たせ、必死に笑顔を作った。沢田くんは困ったように笑い、歩いていた足を止めた。そして、真剣な顔で私の顔を見返してきた。

「本当はもう、知っているんだよね。」

「……知っているよ。でも、沢田くんの口からちゃんと聞きたい。」

「俺は……イタリアへ行くよ。」

目を反らさず、真っ直ぐにそう告げてくれた。わかっていたことだ。

わかっていたことのはずなのに。別れは、覚悟していたことなのに…。

「西崎さん、俺…。」

「私、待ったりしない。」

沢田くんの言葉を遮り、言った。

「沢田くんを待ったりしない。追いかけてりもしない。もう待つのは嫌だから。」

君の重荷になるのはもつと嫌だから。だから…。

「だから、今日でさよならしよう。」

「……。」

沢田くんは私の言葉に肯定も否定もしなかった。ただその瞳は悲しげに揺れていた。お願いだから、そんな瞳で私を見ないで。泣き出しそうな心を見透かさないで。

突然、握っていた手を強く引かれ、気がついたら沢田くんの腕の中にいた。

「ごめん。」

突然のことに頭がついていかない。どうして彼は謝っているの？どうして置いて行くのに抱きしめるの？

私は、君の重荷にしかねないのに…！

悔しくて、悲しくて、涙が溢れてきた。腕の中から出ようともがくが、彼は放してくれなかった。

「嫌！放して！」

「……………」

「置いて行くくせに！何も、話してくれないくせに！…何で！何で！何で！」

沢田くんの腕の中で暴れ、彼の胸を何度も何度も叩いた。それでも彼は私を放さず、寧ろ強く抱きしめてきた。

「好きになって、ごめんね。」

その言葉に、私の動きがぴたり、と止まった。何て、何て悲しい声で言うのだろう。顔を上げれば、切なく揺れる沢田くんの瞳と目が合った。

「俺が君を好きになったから。諦められずに近づいたから。傷つけた。」

悲しみに歪む沢田くんの表情はまるで泣いているようだった。

……違う。違うよ。私は、君を好きになったこと、後悔なんてしてない。想いが通じ合ったこと、後悔なんてしてない。ただ、悔しかっただけ。置いて行かれることが、君の重荷になってしまうことが…。悔しかっただけなの。

そんな悲しい顔をさせるために、別れを切り出したんじゃない。

「俺のこと、忘れて。…………さようなら。」

放れて行く温もりに、私は縋ることも、言葉をぶつけることも出来なかった。

違うのに。

こんな別れ方をしたかったわけじゃない。
こんな風に傷つけたかったわけじゃない。

どうして…。

どうして、私は追いかけられないの？

どうして、違うのだと、伝えられないの？

どうして……。

そう問うくせに、私の中で答えは出ている。怖いのだ。伝えたところで何も変わらない現実を受け入れるのが。これ以上、傷つくのが。

私はただその場に立ちつくし、泣くことしか出来なかった。

2-16 幼なじみ

沢田くんは別れの言葉を告げてから、私と沢田くんは言葉を交わさなくなった。突然の変化にみんな心配してくれた。でも私は笑って誤魔化し、もういいのだと言った。

自由登校が始まり、私は春から一人暮らしをするためにその準備に追われていた。そうしているとあつという間に卒業の日が間近に迫って来た。それは、本当に沢田くんとさようならをする日。

「千景！」

窓の外からの呼びかけに私はのろのろと窓を開け、下を見た。

「武？」

「ちょっと下りてこい。」

真剣な顔でこちらを見上げる武に私は目を瞬かせる。彼ももうすぐイタリアへ行く。そのための荷造りやらなんやらで此処の所全く会っていなかったのだが、そんな忙しい彼が何のようなのだろう。不思議に思いながら外に出るといきなり武に腕を掴まれ、彼はそのまま歩き出した。

「ちょ、何なのよ！武！？」

「俺達、今日、日本を発つんだ。」

「……………え？」

止まりそうになった足を武が半ば引きずるようにして私を引っ張って歩かせた。

「だって、卒業式は？」

「出ない。誰にも言わないはずだった。でも、今のお前らは見てられねえんだ。千景のそんな顔もツナのあんな顔も見ていたくない。」

だからもう一度会え。武はそう言う。でも、今更沢田くんに会ってどうしろというのだろう。私はちゃんと自分で答えを出して、沢田くんに別れを告げたのだ。さよならを、告げたのだ。今更彼に会って、何を言えというの？

「私行かない。」

「千景！」

「だって、今更私が行って何になるの！？私が何を言うの！？私の気持ちには変わらないし、沢田くんが私を連れて行かないっていうのも変わらない！会って何になるの！？？」

「じゃあ後悔しないのか！」

両肩を掴まれ、武はすごい剣幕で怒鳴ってきた。初めて、武に怒られた。

「俺は…、千景が好きだった。」

「！！」

「伝えずにいたことをずっと後悔してた。お前がディーノさんの事で傷ついたのに、何もしてやれなくて、後悔した。俺はすげえ後悔したんだ。だから、お前は後悔する道を選ぶな。ツナとの思い出を悲しいものにするな。だってお前、ツナのこと大好きだろ？」

瞳に涙をためながら、私はこくり、と頷いた。それを見て、武はいつもの笑顔を私に向けてくれた。じゃあ、急がなきゃな、そう言っ
て私の手を握り、再び走り出した。

目の前の武の背中が大きい。いつのまに、彼はこんなにも大きくなったのだろう。いつから、私を護ってくれていたのだろう。何も知らず、私は武に甘え続けていた。

「ありがとう、武。ありがとう…。」

大好きだよ。そう続けようとしたけど、それは言っ
てはいけない気がした。だって、私の好きと、武の好きは違うから。

「ありがとう…。」

「おう。…千景、お前が後悔しない道を選べ。」

私の手を握る武の手に力が加わった気がした。だから私は意志表示に強く握り返した。

ありがとう、優しい人。私の大切な幼なじみ。

2-17 さよなら

「ツナ！」

空港に現れた私を見て、みんなが驚いていた。でも沢田くんが一番驚いていた。瞳を大きく見開いて、何度も口を開けたり閉めたりしていた。

「小僧。まだ時間あるよな。」

武がリボーンに視線を向けると彼は深々とため息をついた。しかしその表情はどこか穏やかだ。まるで予想していたかのように。

「ツナ。搭乗時間までまだ時間がある。話したけりゃ行って来い。」

呆然としている沢田くんに蹴りを入れ、私の目の前まで押しやる。私よりも頭一つ分大きい沢田くんを見上げる。彼はこの1年ほどで随分身長が伸びた。それに昔よりずっと男らしくなった。こりや、女が放つてはおかないだろう。そう思い、苦笑する。この人を繋ぎとめておく自信が私にはない。

「「……………」」

みんなから放れて2人で向き合うものの、互いに無言のままだった。何を話せばいいのかわからず、私は沢田くんの顔を見ることさえできなかった。

「…………見送りに来てくれたの？」

先に口を開いたのは沢田くんだった。あんまり優しい声で、涙が溢れてきた。泣いていてもしょうがないのに。泣いたって私の想いは伝わらないのに。そんな私の頬に沢田くんのちよっと骨ばったでも綺麗で暖かな手が触れた。そっと指の腹で私の涙を拭ってくれた。

「また、泣かせた。…ごめんね。」

「違うの！」

彼にこれ以上悲しい顔をしてほしくなくて、謝ってほしくなくて、私は顔を上げた。だってこんな顔をさせたかったわけじゃないから。私は、私は……！！

「沢田くんが好き。」

頬に触れている彼の手に自分の手を重ね、真っ直ぐに沢田くんの瞳を見て言った。彼の瞳が大きく見開かれた。

「傷つくのは…、悲しいのは…！沢田くんが好きだからだよ。だからお願い…。謝ったりしないで。」

自分でもわかるくらい、声が震えている。今にも俯いてしまいそうでも、ちゃんと沢田くんの顔を見たい。沢田くんから目を反らしたくない。

「私は…、沢田くんを好きになったこと、後悔なんてしてない。また人を好きになれて、よかった。君を好きになって、よかったよ。」

だからお願い。そんな悲しそうな顔をしないで。お願い。私との出会いを後悔したりしないで。

言葉で伝えきれない気がして、私は彼に近づき、背伸びをすると、沢田くんの唇に自分の唇を重ねた。ほんの何秒間の口付けが、私には永遠のようにさえ思えた。

「愛してる。」

身を放し、そう告げれば、目を見開き驚いていた沢田くんの表情が泣き出しそうに歪んだ。それを隠すように私の肩に顔を埋める。

「俺も君が好きだよ。誰よりも、誰よりも愛してる。でも、だからこそ、連れていけない。」

声が震えている。私を抱きしめる腕も微かに震えている。もしかしたら、彼は泣いているのかもしれない。1ミリだって放れたくなくて、私は彼の背に手を回した。そうしたら、より強く、沢田くんは私を抱きしめた。

「好きなのに……！好きだから……！連れて行く訳に行かないんだ。」

彼の悲痛な叫びが胸に響く。どんどん強くなる抱きしめる腕が、放したくないと言われているようで。嬉しいはずなのに、今はただ切なくて、また頬を涙が伝った。

そっと沢田くんが身を放し、私の頬を包んだ。どちらからともなく近づき、私はそっと目を閉じた。

唇に柔らかく、暖かな温もりを感じる。吐息が混じり合う。このまま、ずっと一緒にいられたらいいのに。そんな想いが頭を過る。

唇が放れ、温もりも放れて行く。私は縋るように沢田くんの手に頬

を寄せた。暖かい、大好きな君の手。この手がいつか誰かの物にな
ってしまふのなら、それはとても悲しい。でも、沢田くんはこの手
で守るものがたくさんあるから。独り占めには出来ない。でも、願
うことだけは許されるだろうか。

「誰のものにもならないで…。」

「……………」

呟くように紡がれた言葉に沢田くんは肯定も否定もせず、優しく微
笑んだ。その表情に悲しみはない。

「ツナ、時間だ。」

リボーンの声が、私たちに別れの時を告げた。

「分かった。」

沢田くんの手が放れて行く。その手を私が掴むことはもうなかった。
沢田くんは私に背を向け、歩き出し、数歩行ったところで止まった。
振り返り、優しい笑みを浮かべたまま口が開いた。

声になることのなかったその言葉は確かに私に届いた。

（愛してる。だから、さようなら…。）

彼は確かにそう言った。涙が後から後から溢れて来る。

本当は行かないで欲しい。

置いて行かないで欲しい。

連れて行って欲しかった。

でも、それは出来ないから。だから別れるしか道はなかったのだ。

「愛し…、てる。」

さようなら。愛してるから、誰よりも大切だから、だから……、
さようなら…。

2-17 さよなら（後書き）

次回から三章に突入です。

3-1 君のいない日々

卒業式を迎えて、私は大学生になった。

東京での一人暮らしは最初こそ不安でホームシックにもなったけど、馴れてくれば、自分の城が出来たようで自由気ままに生活を送れるのが楽しくなった。

当たり前のように春が過ぎ、夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬が過ぎ……、そうして季節は廻った。

変わったことはたくさんある。

短かった私の髪は今では胸ぐらいまで伸びた。少しは化粧もするようになった。大学の友達はたくさんできたし、何度か告白もされた。周りも私も色々変わっていく。変わらない物なんてありはしないのに……。

そんなある日、花から連絡が入った。

懐かしい高校時代の友人からの誘いにその週末、私は並盛の町に一度戻った。ほぼ2年ぶりに戻った並盛は何も変わっていないくて、心まで高校時代に戻りそうだった。

「千景。」

懐かしい声に振り返れば花が立っていた。懐かしい友人に私の頬は自然に緩み、彼女に向かって駆け出した。

「花！久しぶりだね。」

「本当よ。あんた、全然帰ってこないんだもの。」

花は地元から通える大学に通っている。だから本当は私が並盛に戻ってくれば会えるのだ。暗にもっと頻繁に帰って来いという花に私

は曖昧に微笑んだ。

私たちは高校時代からお気に入りのお店、ナミモリーヌに入り、紅茶とケーキを注文して最近の出来事を話して盛り上がった。大学の講義は眠いとか、サークルはどうだ、とか…。

「千景は好きな人できたの？」

「花はできた？」

花の質問に私は質問で返した。そんな私に花はため息をつくと自分の事を話してくれた。

「彼氏できた。」

「嘘！？やっぱ年上？」

「嘘ってなによ…。年上だけど、全然年上っぽくないけどね。」

年上だけど年上っぽくない人…。花がそんな人と付き合うなんて…。たぶん呆けた顔で花を見ていたのだろう、何の前触れもなくでこピンされた。

「それで、あんたは？…まあ、どうせいないんだろうけど。」

私は苦笑するしかない。好きな人はいる。高校生のときからずっと好きな人。でも、彼を想っていたってしょうがないとわかっているから。言葉には出したくないんだ。

「まだ、沢田が好きなの？」

「……………」

花の質問に私は肯定も否定もしなかった。私は目の前の花から視線

を外し、窓の外を見た。

何も変わらないこの町。だけど、この町にももう、沢田くんはいない。

帰ってこない。

会いたくても、会えない。

「早く誰かを好きになれたら、楽になれるのかな…。」

「千景…。」

「ねっ！花の彼氏ってどんな人？」

花とはその後、彼女の彼氏についてずっと話していた。私に対する質問の余地を与えない勢いで私は花に質問した。

何でも花の彼氏さんは海外で仕事をしているらしい。そのためあまり会えないのだという。

すぐに頭に血が上ってしまうが意外と女性に気が遣える紳士な部分もあるらしい。

時折憎まれ口を加えながらも彼氏さんの話をする花の表情は幸せそうだった。

「じゃあね、花。彼氏と幸せに。」

帰り際、花にそう言って手を振った。次会えるのはいつかわからないから。

「千景！」

何処か切羽詰まった花の声に振り返ると、花はとても悲しそうな顔をしていた。彼女の言おうとしていることがわかって、私は笑った。

「大丈夫。」

そう言って今度こそ、花と別れた。私は真っ直ぐ家には帰らず、懐かしさ漂う並盛の町を歩いていた。並盛中、高校、通学路に公園、穂月さんのお店にも顔を出した。

そしてそのどの場所にも沢田くんとの思い出があって、愛しくて、切なかった。

沢田くんのいない毎日はとても寂しくて、まるで世界から色が消えてしまったかのように味気ないものになってしまった。

友達もたくさん出来て、大学生活も充実していて楽しいはずなのに物足りなさを感じる。

色々な変化が起こる毎日の中で私の心は変わらずに沢田くんを求めている。狂おしいほどに沢田くんを想っている。

「大丈夫」。

それは私の呪文の言葉。沢田くんがいない毎日に負けないで笑っているための。

それでもね、時々どうしようもなく寂しくなるの。

青空を見上げた時、雪の降り積もった銀世界を見た時、甘めのカップチーノを飲んだ時……。

どうしようもなく、君に会いたくなる。

君の声で名前を呼んで欲しくなって、骨ばった、でも綺麗な君の手の温もりを感じたくなる。

抱きしめて欲しくなるの。

君のいない日々はなんて…、息苦しいのだろう…。

3-2 イタリア（前書き）

今回、短いです。

3-2 イタリア

再び大学生活に戻った私の元に一通の手紙が届いた。それは以前、バイトでお世話になっていた叔母の穂月さんからのものだった。

先日、並盛に帰った際も一応顔は出したのだがあそこにはたくさん
の思い出があって、すぐに出てきてしまったのだった。

「それにしても、穂月さんが私に手紙なんて珍しい…。」

独り言を呟きながら封を切った。

中には手紙と航空券が入っていた。それを不思議に思いながら手紙を開き、その内容に私は目を見張った。

千景へ

久しぶり。まあ、この間会ったばかりなのだけど。

手紙を書いたのは以前に会った時に話すのを忘れていたからなの。実は、コーヒーマーの勉強に一度イタリア旅行に行こうと思っているの。だから千景も一緒にどうかと思って。

あなた、大学でイタリア語を専攻してるんでしょ？

役に立ちそうだし、旅費はこっちでですから。

夏休みに入ったらすぐにいくから準備しておいてね。

月より

穂

航空券を送ってきている時点で私の意見を聞く気はないな。ていうか、手紙の内容も誘っているというより決定事項だし…。

手紙と航空券を覗みながら私はため息をついた。

イタリアか…。

そこに行った人を想い、私は再度ため息をつく。

沢田くんはもう、私のことなど忘れてしまっただろうか…。

イタリア旅行。

偶然にしろ、必然にしろ、沢田くんのいる場所に行けるといえるのは何かあるのかもしれない。カレンダーを見れば、夏休みまであと数週間。少しずつした方がいいかな。

………ていうか、穂月さんはどのくらいの間行くつもりなのだろうか？

3-3目撃

「ボンジュール、イタリア!!」

空港に辿り着くや否や声を上げる穂月さんを他の客が凝視する。そして私は知らないふり。

「行くわよ、千景! ホテルに荷物を置いて、さっそくコーヒーを飲みに行きましょう!」

腕を引っ張られ、私の知らないふりは失敗に終わった。無駄にテンションの高い穂月さんに苦笑する。

元々穂月さんはイタリアにコーヒーを飲みに来たかったのだそうで、今までこつこつと旅費を溜めていたらしい。そんな訳で旅費を払ってくれるという穂月さんの申し出を断り、私は自分のバイト代と今までのお小遣いを合わせて今回の旅行に同行した。

ホテルまでの道を歩きながら、私は初めて見るイタリアの街並みを見まわしていた。どの建物も日本の質素な物と違ってお洒落だ。カフェにしたってどこも綺麗だったり、可愛かったり…。まるで絵本のおとぎの国に迷い込んだような気分だ。

「穂月さん、あとで色々と回ってみてもいい?」

さっそくカフェに入り、コーヒーを飲みながら私はガイドブックを開きながら穂月さんに尋ねた。

「いいけど、私は予定があるから一緒には回れないわよ。」

「うん。穂月さんの用事が済む間だけだから。」

好きにしない、と穂月さんは穏やかに微笑み言った。

もうすぐ40歳になると言っていたけど、この人は昔から変わらず綺麗だ。イタリアの男性だろうと誰だろうと魅了してしまいうさだ。

穂月さんの用事が済むまでの3時間程を私は一人で観光することになった。ガイドブック片手に行ってみたかった場所やイタリアでも有名なカフェなどに行ってみた。

有名と言われるだけあって、そのお店のコーヒーはなかなか美味しかった。でも、ちょっと高級感が溢れていて、私には向かないかも。

そんなことを思い、お店の外に出ると向かい側に真っ黒なリムジンが止まっていた。リムジンなんて初めて見るものだから思わず立ち止まって見入ってしまった。

リムジンの扉が開き、現れたのは……薄色の髪だった。

私が、彼を間違えるはずがない。

息が、止まるかと思った。だが、続いて出てきた人を見て、私は背を向け、走り出していた。

金に近い茶の髪。髪は長くなっていたが、あれは京子だ。

知らない女の人が隣にいる以上に私はショックを受けていた。彼女は確かに沢田くんと一緒にイタリアへ渡った。だから一緒にいるのは不思議じゃない。

でも、2人は腕を組んでいた。どう見たって恋人同士にしか見えない。

どうして、よりもよって京子なのだろう。これならまだ、知らない女の人を愛してくれた方がよかった。

だって、京子は全部知っているのに。

私が、沢田くんを好きなことも、沢田くんが私を好きでいてくれた

ことも、放れるしかなかったことも……。

だけど彼女は今、沢田くんの一番近い所にいる。

それが羨ましくて、悔しい。なんて、浅ましいんだろう。私は彼の幸せを願っていたんじゃないの？ だとしたらこれは、私の望んだ結果じゃない。

……本当に？

私は、本当にこれを望んでた？

違う……！

だって、心の何処かで期待していた。

私が今でも彼を好きでいるように、彼が私を愛し続けてくれていることを。また出会い、笑顔向けられるその時を、私は期待していた。

今でも彼に愛されていることを。

苦しくなる胸を抑えて、泣きだしそうなのを我慢して、小さな声で呟いた。

「何であたしだけ、こんなに苦しいの……？」

今でもこんなに好きなのに。好きすぎて、君のいない日々息をするのも苦しいのに。どうしたら私はこの苦しみから抜け出せるの？

「千景？」

名前を呼ばれ、びっくり、と肩を揺らす。恐る恐る振り返ると、そこに立っていたのは武だった。

懐かしい幼なじみ。彼は驚きに目を瞬かせていた。そして私の顔を見て眉を寄せる。

「どうした？何かあったのか？」

「何も、ない。ちよつと道に迷っただけ。でも、大丈夫だから。」

顔を背け、すぐに歩き出そうとした私の腕を武が掴んだ。

「何？」

「ツナに会いに来たのか？」

脳裏に懐かしの薄色の髪が浮かぶ。固く目を閉じ、それを振り払う。

「穂月さんと旅行に来ただけ。」

「そうか。」

暫くの沈黙の後、私は小さな声で言った。

「言わないで。」

「え？」

「私に会ったこと、絶対沢田くんと言わないで。」

「…何で？」

「もう関係ないからよ！」

涙で滲んで武の顔がよく見えない。でも、なんとなく困惑しているのがわかる。そんな顔をむけられれば余計に自分が惨めに思えた。勝手に期待して、勝手に落ち込んで。そんな自分が惨めで、愚かしくて……。

これ以上、そんな気持ちになりたくなかった。

「ちか…。」

「放して！」

思い切り腕を引き、武の手から逃れようとするが彼は放してはくれなかった。直も暴れ続ける私を武は抱きしめた。

「千景、落ち着け。」

優しく背中を撫でられ、私は少しずつ落ち着きを取り戻し始めた。混乱は大分納まったが涙は止まらなかった。

「ツナに会いたくねえなら無理に会わせようとはしねえ。でもさ、せめて俺に送らせてくれ。今の状態で一人にさせるのは心配だから。」

武の腕の中でこくり、と頷けば、よし、と頭上から明るい声が聞こえた。

靄のかかる頭の中に、沢田くんの最後の優しい笑みと言葉を思い出していた。

（愛してる。だから、さようなら…。）

あの日、沢田くんはきっぱりと私と別れたのだ。未練をあの場に残し、私の存在も消したんだ。

さよなら出来ていなかったのは、私だけ…。

3-4 許し

あの後、どうやってホテルまで戻って来たのか、薄らとしか覚えていない。とりあえず武に手を引かれながら帰って来た。そのあとすぐにベッドに入って泣きつかれたのか眠ってしまった。朝になって目が覚めた時にはもう、武の姿はなかった。

昨日の出来事全てが夢であればいいと思ったが、テーブルの上にあった置き手紙が昨日のことが現実だと訴えて来る。

『時間を作ってまた来る。ゆっくり休めよ。』

武より』

手紙を呼んで、私は深々とため息をついた。

律儀と言うか、なんというか。別に会いに来てくれなくていいのに。武は沢田くんに繋がっている。それはどうしたって私を苦しくさせる。

「千景、起きたの？」

「：おはよう、穂月さん。」

精一杯の笑顔を浮かべて穂月さんを振り返れば、彼女は心配そうに顔を歪ませた。

「無理しているでしょ。」

「無理、しているのかな…。」

苦笑する私に穂月さんはため息を吐くとコーヒーを淹れるからと言って私を部屋にあるソファに座らせた。ふかふかのそれに腰を下ろし、目を閉じる。

薄色の髪が蘇る。

……顔くらい、見ておけばよかったかな。

どんなに苦しくても、悲しくても、それでも私は彼を嫌いにはなれない。

「ねえ、穂月さん。」

「何？」

丁度コーヒーを淹れて戻って来た穂月さんに私は問いかける。

「忘れられない人っている？」

「…いないわ。」

残念ながらね、と少し茶目っ気を含ませて言う穂月さんに私は力なく微笑んだ。

「千景にはいるの？忘れられない人。」

「…高校3年生の時に別れた人が今でも好き。でもその人は、今はもう別の人と幸せになっているみたいなの。それが、すごくつらい。」

別れることに納得したはずなのに。彼の幸せを願い、忘れられても構わないと思ったのは嘘ではないのに。

いざ目の前に突き付けられた現実は悲しかった。

「毎日を泣いて過ごすくらいなら、忘れてしまいたいのに。…どうしたら忘れられるかな。」

「どうして？」

「え？」

「どうして忘れたいの？彼がもう、千景を好きじゃないから？」

心底不思議そうに聞かれて私は戸惑う。違っても違わないとも言えなかった。確かに、彼が私を好きじゃないのはつらい。でも、忘れてしまいたい本当の原因はそこじゃない。苦しいからだ。

「思い続けるのが苦しいから。悲しくて、惨めな気持ちから逃げたいから…。」

惨めにさせるこの現実から逃げてしまいたかった。今でも沢田くんを思い続ける自分は惨めで愚かだ。そんな気持ちになるのは嫌だった。

消し去りたい、忘れない…!!

「だからって今の自分の気持ちまで否定する必要があるの？」

「え？」

「確かに相手から気持ちを返されないのはつらいし、苦しいわ。でも、だからって惨めに想う必要はないわ。だって、あなたはそれだけその恋に本気だってことでしょ？そんな感情を抱いてしまうくらい、彼が好きだってことでしょ？それは誇るべき気持ちだわ。」

この醜い気持ちか？この浅ましい思いか？本当に誇れる気持ちだろうか…。

不安に揺れる私の瞳に気がついたのか、穂月さんは優しく私の頭を撫でた。

「好きでいることを素直に受け入れなさい。そうしたら、きっと少しは楽になる。」

「…好きだから、苦しいのに…。」

「許してあげないからよ。醜い感情を抱いてしまう自分を。だから、

本当の意味で許してあげて。彼を好きな、あなた自身の想いを…。」

抱きしめられ、私の瞳から涙が一筋零れた。

私は、許せるだろうか…。

この醜い感情全てを受け入れるのは難しい。そう簡単にはいかない。たぶん、当分の間は苦しむと思う。でも、出来ることなら…。

私は、私を…。

沢田くんを好きな私を許してあげたい。

3-5 会いたくない理由

イタリア旅行3日目。武が本当にやってきた。意外な人物と共に…。

「まさか沢田くん第一主義の獄寺くんがやってくるとは…。」

「ふん、莫迦にすんな！俺は今でも10代目一筋だ！」

「ああ…、そうなんだ……………」

見た目は大人びても中身は莫迦な獄寺君のままなんだね。

「残念なものを見るような眼で俺を見るな！」

「ははっ。相変わらず仲良しだな。」

「私たちが仲良しに見えるなら、武の眼は節穴だね。」

「千景、目が笑ってねえぞ。」

珍しく武が引き笑いを浮かべる。怖いもの知らずの武でも幼なじみの私の作り笑いは怖いらしい。昔仕込んでおいた甲斐があったな。

「相変わらず黒いな。」

「ちよっと待ってよ。相変わらずって何!？」

聞き捨てならない言葉に獄寺君を睨むが彼は顔を反らし、どこ吹く風といった様子だった。

こいつ、殴ってもいいだろうか…。

「あのね、黒いっていうのはリボーンとか骸さんとかリボーンの事を言うんだよ。」

「リボーンさんが2回入ったぞ？」

それぐらいリボンが黒いつてことだ。だってあいつ心の中真っ黒だろ。一点の白も存在しないくらい真っ黒だろ。もういっそ清々しいくらい真っ黒だろ。

「誰が真っ黒だって、千景？」

突然現れた新しい声に私は息を飲む。背中を冷や汗が流れる。

「わあ、久しぶりだね。リボン。」

「久しぶりだな、千景。」

ニヒルな笑みを浮かべたりリボンが昔と変わらぬ姿でそこにいた。こいつは年をとらないのだろうか…。妖怪か何かなのかな？まあ、でかくなったら可愛げなくなって、余計に腹の立つ子どもになりそうだけど。

「思考がダダ漏れだぞ、千景。撃ち殺されたいのか？」

「えっ！？声に出てた？」

「俺は読心術が使えるんだぞ。」

だからそれ、プライバシーの侵害だから！

「ていうか、武！何だってこんなに連れて来るのよ！」

「ダメだったか？ツナには言っていないぜ？」

「…っ。」

反論しようとするが言葉が出ない。確かに沢田くんと言わないで、と言っただけで他の人については何も言わなかった。

「そこが気に入らねえ。」

「……何が？」

「何で10代目に会わねえ。」

「…会って、どうするの？」

私と彼は別れたのだ。沢田くんがイタリアへと旅立ったあの日に。私は彼を待たないと言って、彼は私を置いて行った。それに、沢田くんの隣には今、京子がいるじゃない。

「私は沢田くんと笑って話せる自信がない。だから会いたくない。」

「千景…。」

「そもそも！私と沢田くんを会わせる気があるわけ？」

リボーンに向けて笑みを浮かべながら尋ねた。武、獄寺くんの視線もリボーンに集まる。

最終的には自分で下した決断だけど、私はリボーンの意向に従い、沢田くんと別れた。私と沢田くんを別れさせたリボーンが私を彼に会わせてくれるとは考え難い。

「お前は今でもツナが好きか？」

「質問したのは私なんだけど。」

「答えろ。」

「……好きでも嫌いでもない。ただ、もう二度と、会いたくない。」

嘘。

今でも彼が好きだ。彼に会いたくてたまらない。声を聞きたくてたまらない。

だけど、沢田くんがもし、他の誰かのものだったら？

その現実には、私はきつと耐えられない。それに、私はまだ、沢田くんを好きな自分を許せていない。だから言えない。言いたくない。

今は沢田くんに会いたくない。

「お前が会いたくないなら、会わせるつもりはねえ。」

……何それ。じゃあ会いたいと言えば会わせてくれたわけ？

別れると言ったくせに。近づくと言ったくせに。

沸々と沸き上がる怒りを私は必死に抑え込み、リボーンを睨みつける。

「千景、ツナはきつと、会いたいと思う。」

「俺もそう思うぜ。10代目は……………」

「勝手なことばかり言わないで!!」

気付いたら私は怒鳴っていた。武と獄寺君が驚いた顔でこちらを見ている。リボーンだけが私の心情を見透かしたように冷静にこちらを見ていた。

その冷ややかな視線が余計に私を苛立たせる。

やめて! 私の心を見透かさないで!

「私を置いて行ったのは彼でしょ! 私は今、沢田くんのいない今を過ごしているの! 今更、会いたくなんてない!」

会ったら、会ってしまったら、明日を迎えるのが怖くなる。沢田くんのいない毎日を送るのが怖くなる。

「千景……」

「西崎……」

ごめん、そう言って武は私の頭を撫でてくれた。獄寺くんは何か言

いたげな瞳をし、だが首を振って頭を乱暴にかき上げた。

「千景。明日、パーティーがある。お前、出席しろ。」
「…お断りします。」

気持ちを落ちつけた私はリボーンを睨みつけた。

「お前に拒否権はねえ。それとも、穂月を一人でこちらに寄こすか？」
「?!」

つまり、穂月さんを私がパーティーに行くための人質として誘ったわけ。

「人でなし。」
「褒め言葉だな。明日迎えをよこす。屋敷で待ってるぞ。」

そう言ってリボーンは困惑している2人を連れて帰って行った。

3-6 パーティー

リボーンが指定した日、時間に迎えの車は来た。

乗り気でない私は穂月さんに引きずられるようにして車に乗り、パーティーの行われる洋館まで連れて行かれた。それは以前、ディーノに別れを告げた洋館に雰囲気似ていた。

だからだろうか、ここに沢田くんがいるような気がした

私たちはメイドの様なひとたちに連れて行かれ、洋館の一室でドレスに着替えさせられた。まるでディーノと別れた日の再現のようで、私の心に不安が降り積もって行く。

リボーンの考えていることが全くわからない。

何故、私をここに連れてきたの？ここで何かあるの？

化粧や髪型を整えられている間、私は不安で揺れる心を必死に沈めていた。

考えるな。何も考えず、何も受け入れず、ただ時間まで耐えればいい。

そして穂月さんと共に、私たちはパーティー会場へと連れて行かれた。

華やかな女の人たち、スーツに身を包んだ高貴な雰囲気と威厳を持った男の人たち。そして豪華な料理。煌びやかな世界に私は気後れする。

この世界は私のいる場所とは違う。

「別世界」。というのがぴったりの言葉のような気がした。

私は入って早々壁の花と化した。ちなみに穂月さんは珍しい料理が一杯だと嬉しそうに料理の観察に向かった。この場に気後れしていない彼女に驚き半分、変な人に声をかけられないか心配半分。中身

は好奇心の塊のような人だけど外見は美人だし。

「心配しなくても穂月に手を出す奴はいねえぞ。」

「…リボン。」

私の不安の原因を作った人物の名を私は気持ち低めの声で呼んだ。パーティーだというのにいつもと同じ真っ黒なスーツとボルサリーノ。しかし全く違和感がない。

「君はこの住人ってわけね。」

ため息交じりに言えば、リボンは何も答えずにただ変わらぬ澄んだ瞳で私を見ていた。まるで心の奥底まで見透かされそうで私はリボンから視線を外して目の前の光景を眺めていた。

今の所沢田くんらしき人には会っていない。会えなくていい。このまま会えないまま、何も知らないまま帰りたい。

「こんばんは、千景。お久しぶりですね。」

懐かしい声に顔を上げるのと同時に目の間に飲み物を差し出された。驚きながら差し出された飲み物を受け取る。

「…骸さんもいらしてたんですか？」

「まあ、仕事ですからね。」

久しぶりにあった骸さんは髪が伸びていたが、パイナップルな感じとか怪しい感じは変わらなかった。

「千景、失礼なこと考えてませんか？」

「滅相もございません。」

黒い笑顔も相変わらずのようで……。

私は真っ黒な笑顔を浮かべる骸さんに作り笑いを浮かべて応えた。

「へえ、千景来たんだ。」

「あれ、雲雀さん。こんな群れの中でどうしたんですか？」

「なんか、口調が刺々しい気がするんだけど。咬み殺していいの？」

相変わらずの無表情、危険発言で現れた雲雀さんだけど、やっぱり成長しているらしく仕事だからこうして群れの中にいるのだと説明してくれた。

「千景は綺麗になったね。啼かせてみたい。」

「えっ。嫌ですよ、泣く思いをするのは。」

「……雲雀恭弥。ちょっと殴っていいですか？」

「どうしたんですか、骸さん。ブラックスマイル発動してますよ。」

「ほっとけ、骸。千景は気付いてないぞ。」

「…相変わらず鈍いんだね、千景。」

せっかく綺麗になったのに、とさも残念そうに言われ、眉を寄せるがさっぱりわけがわからない。

雲雀さんは私の隣に立つとここ何年かで随分伸びた私の髪を弄んだ。女顔負けの綺麗な指に私の真っ黒な髪が絡む姿はどこか艶めいて見えて、少しドキッとした。

相変わらず綺麗な顔立ちにしばし見とれていると突然肩を抱くようにして引き寄せられた。

「あまりべたべたと千景に触らないでもらえますか？」

「骸さん？」

「君こそべたべた触らないでくれる？」

両隣で睨みあう2人に困惑しているとリボンが何故か楽しそうに笑っていた。

「どうしたの？リボン。」

「いや。おい、千景。悪いんだがその料理適当に俺に持ってきてくれねえか。」

「い、いいけど。」

悪いんだがって言い方がリボンらしくなくて私は思わず頷いていた。

睨みあう2人を放っておき、私は目の前のテーブルに向かった。適当にお皿に料理を盛っていると誰かが私に近づいてくるのがわかった。顔を上げたらものすごい美人が私にっこりと笑いかけて話しかけてきた。

一応イタリア語は習っているけれど、だからと言って本場のイタリア語を聞きとれるほどの能力は私にはない。ぽかん、とした顔で見ているとその美人の顔が小馬鹿にしたように一瞬変化したのを私は見逃さなかった。

彼女は私が日本人で、イタリア語がわからないであろうことをわかったうえで話しかけて来ているのだ。そしてこうなるであろうことをわかっていて、リボンは私にここまで料理をとらせに来た。

つまり私はけんかを売られているらしい。

……知っている、リボン？私、負けず嫌いなもの。

私はお皿を一旦テーブルに置くと目の前の美人にっこりと笑いかけた。姿勢を正し、真っ直ぐに女の顔を見据える。

不安を表に出すな。姿だけは真っ直ぐに凛々しくあろう。怯んだら、そこで負けだ。

自分にそう言い聞かせる。彼女は私の雰囲気が変わったのを察したのか、言葉に詰まりだした。よくわからないけど、何でこんな女が…、みたいなことを呟いているのが聞きとれた。何の事だかよくわからなくて、私は心の中で首を傾げる。

『そろそろ僕たちのお姫様を返していただけますか。』

「千景。勝手にうるつかないでよ。」

目の前に骸さんが私を庇うように現れイタリア語で目の前の女性に何かを言い、後ろから現れた雲雀さんに抱き寄せられた。男の人に抱き寄せられたのなんか久しぶりすぎて、私の頬は自然と熱を持つ。

「どさくさにまぎれて千景にセクハラするのはやめてください。怒られますよ。」

「よくわかってるじゃないか、骸。」

誰に？そう問おうとしたら声が聞こえた。

その声に私の心臓は大きく一つ鼓動を刻み、私は雲雀さんの腕の中で身を強張らせた。

「いい加減、放れてもらえますか？雲雀さん。」

「もう仕事終わったのかい？」

「何残念そうにしてるんですか。」

「はいはい。」

雲雀さんがとても名残惜しそうに私から放れ、開けた視界の向こうにいたのは、薄色の髪を持つ、会いたくて、会いたくて…、でも、会いたくなかった人だった。

「久しぶり、西崎さん。」

「沢田くん…。」

とうとう、会ってしまった…。

3-7 懐かしい温度（前書き）

更新遅くなりました。

3-7 懐かしい温度

「もう仕事を終えたんですか？」

「そうだってさっきも言っただろ。」

呆れたように言う沢田くんは骸さんはいつもそれなら助かるんですけどね、とため息交じりに呟いた。その呟きに沢田くんは拗ねた顔になる。幼さの残るその表情は私の知る沢田くんで、ひどく胸が苦しくなった。

「千景？」

「西崎さん？」

2人に驚いた顔で見られ、戸惑う。

私は何かしたんだろうか？

「泣いてる。」

隣に立っていた雲雀さんが私の目じりを拭う。そこで初めて私は自分が泣いていたことを知った。

どうして、私泣いているんだろう。

何も悲しくなんてないのに。すぐく愛おしくて、でも切なくて…。

それはきっと、もう届かないと分かっているからかもしれない。だから昔と変わらぬ君を見ると、愛しくて、切なくて、胸が締め付けられるんだ。

「ツッ君？」

びくり、と肩が揺れた。現れたのは、先日見た女性と同じ姿をした

京子だった。あの日、沢田くんに寄り添っていたのはやっぱり京子だった。

「もしかして、ちかちゃん？」

驚いて私を見る京子に私は精一杯微笑んで見せる。沢田くんの隣に立つあなたはなんて綺麗なんだろう。なんて、凜としているんだろう。

どうして…、どうして、そこに立つのは私じゃないんだろう。

どうにも抗いがたい感情に私は一歩後ずさる。

つらい。

ここにいるのが、とても苦しい。

みんな昔の様に私を受け入れてくれるのに、私の知らない時間があって、確かに何かが変わっていて、沢田くんが遠くて…。

「ごめんなさい、少し、外の空気が吸いたい。」

「千景？」

私はみんなに背を向け、会場を抜けた。当てもなく歩き、庭の様な場所に出た。やっと、息が出来るような気がした。月明かりに照らされて闇夜に浮かぶ花々は美しく、孤独で、悲しかった。それを見ていたら、自然と涙が溢れてきた。大粒の涙が頬を伝い、地面に落ちる。

私の胸を占めるのはどうして、というこれまで何度してきたかわからない問いかけだった。

どうして、私は沢田くんの隣に立てないの？どうして、好きなのにこんなに苦しいの？どうして、京子なの？どうして、どうして、どうして……。

問いかけてもしょうがないのに、隣に立てないことも、苦しいのも、隣に立つのが京子であることも受け止めるべき現実で、隣に立てな

いのは私が無知なせいであることも、好きだからこそ苦しいことも、支えてきたのが京子だってこともちゃんとわかってるのに、私は飽くことなく同じ質問を心で繰り返す。

「どうして…、私じゃダメなの…?」

「西崎さん?」

思わず振り返ると、驚いた顔をした沢田くんが立っていた。すぐに我に返り、自分の顔が涙でぐしゃぐしゃであることを思い出す。咄嗟に踵を返し、走り出そうとしたが沢田くんは腕を掴まれてしまった。

「何で、泣いてるの?」

「泣いて、ない。」

「泣いてるよ。今日は月が明るいから、よくわかる。」

お願いだから、そんな風に優しくしないで。そんな風に私に触れないで…。

「何で、泣いてるの?」

「やめてよ…。」

「西崎さん?」

「やめてよ!」

私は思い切り腕を引き、沢田くんの腕を振り払った。

「私が泣いていようが沢田くんには関係ない!お願いだから、これ以上踏み込んでこないでよ!」

溢れる涙をそのままに私は沢田くんを睨みつけた。ひどく傷ついた

瞳が私を見つめる。

どうしてそんな瞳をするの？

やめてよ…。これ以上、かき乱さないで。これ以上、私に惨めな思いをさせないで…。

「先に、踏み込んできたのはそっちだよ。」

一歩踏み出し、その一歩で私と沢田くんの距離は縮まった。身を退く隙を与えず、私は沢田くんの腕の中にいた。

「俺をかき乱すのは、君だよ…。」

あまりにも切なく漏れる言葉に、私は金縛りにあったように動けなくなってしまうた。

「な、んで…?」

何で、そんな声で言うの？何で、抱きしめるの？

緩く囲われた腕の中で身じろげば、逃げると思ったのか、先ほどよりも強く抱きしめられた。雲雀さんに抱き寄せられた時以上に胸が騒ぐ。ドキドキする。

「やっこの思いで手放したのに、突然現れるし。かと思えば、雲雀さんに抱きしめられてるし、目は合わせてくれないし、泣くし、逃げるし。」

言葉は責めているのに、どこか拗ねているようなその口調に私の頭は戸惑うばかりだ。

「えっと、ごめん、なさい…?」

「謝るなら、俺の顔を見て欲しいんだけど。」

見上げれば、先ほどの口調とは裏腹に不安に揺れている沢田くんの瞳があった。

「余裕があるように見える？」

素直に首を振れば、沢田くんは苦笑する。昔と変わらぬその笑い方にまた、私の瞳から一筋涙が零れる。そんな私に穏やかな笑みを浮かべた沢田くんは再び私を抱きしめた。さっきよりもずっと強く。放さない、というように。

「ごめん。ダメだってわかっているんだ。でも、どうか今だけは…。」

もう少し、このままで。弱々しい声で紡がれた言葉に抗う術を私は持たず、緩々とその背に腕を回した。そしたら抱きしめる力がまた少し強くなった。

懐かしい君の腕の中は、ドキドキして、でもやっぱり、安心できる場所だった。

なのに、どうしてなのかな…。涙が止まらないの…。

3—8 断ち切る決意

今日は遅いからということでは私は沢田くんに部屋に案内された。しばらくしたらお酒を飲んで上機嫌の穂月さんが武に連れられてやってきた。2人で何やらしゃべっている穂月さんをベッドに寝かせ、今、この部屋で起きているのは私だけだ。

窓際に椅子を運び、その上で膝を立て座りながら空を見上げながら思うのは去り際の沢田くん。

全然私の方を見ようとはしてくれなくて、最後に見せたのは作り物の笑顔だった。まるで距離を置かれたようで、すごく悲しかった。膝の上に置かれた手首を視界に入れ、私はもう片方の手でその腕を撫でた。まだ沢田くんの温もりが残っているような気がして唇を寄せれば、涙が一粒零れ落ちた。

「今日は涙腺が弱いみたい。情けないな。…ね、リボン。」

呼びかけると、真っ暗なはずの闇の中でそれが動いた。

「よくわかったな。」

月明かりの下に現れたのはパーティーの時と同じ格好をしたリボンだった。

「なんとなく、来るような気がしていたから。」

「そうか。」

「…作り笑いを、向けられたの。」

まるで、これで終わりだと言うように。もう、会わないと言うよう

に。

「千景、お前は…。ツナが好きか？」

すごく優しい声での問いかけだった。だからなのか、涙がぽろぽろと溢れてきた。言ってもいいのだと、言われているようで。

「す、き…。沢田くんが好き…。」

好き、好き、好き…。

まるで壊れてしまったかのように私は何度もその言葉を繰り返した。だって、何度言っても足りないくらいに好き。好きなの…。だからお願い…。さよならなんて言わないで。私を、置いて行かないで…。

「やっと素直に言ったな。」

苦笑まじりの言葉に私は涙を必死で拭いながらしゃくりあげる。もう20歳も過ぎた大人がみつともなく泣いているのに、リボーンは相変わらず優しい声で私はまるで幼い子供のように泣き続けた。

次に目が覚めたら、窓の外にあるのは空高くに上った太陽だった。ぼんやりとした頭で部屋の時計を探す。立派なテーブルの上に置かれた立派な置時計の差す時間は11時32分。立派に寝坊していた。

「うわ…。」

ため息交じりに立ちあがるとぼさりと床に何かが落ちた。ブランケットだった。たぶん泣き疲れて眠ってしまった私にリボーンがかけてくれたのだろう。

昨日のリボンは随分優しかったな、なんて考えながら私はそれを綺麗に畳んでテーブルに置いた。

穂月さんの様子を覗きに行くと、彼女は幸せそうな顔でまだ眠っていた。あんまり幸せそうだから起こすのが忍びなくて、そっと寝室を後にする。

部屋をよく見れば昨日来ていた洋服が置いてあった。それに着替え、私は再び窓際の椅子に腰かけた。

そして、沢田さんと京子を見つけた。

動揺はなかった。彼は京子を選んだ。その事実だけが心に刻み込まれた。

選んでくれないなら、傍に居させてくれないなら、なにより…、私が君を惑わせるなら…。

私は立ち上がるとさっきは寝かせてやろうと思った穂月さんを無理矢理起こした。

「何よ、千景。もう少し寝かせてくれてもいいじゃない。」

「もう正午ですよ。いつまで寝るんですか。」

「…ねえ、何で泣きそうな顔してるの？」

「帰ろう、穂月さん。」

穂月さんの問いかけには答えずに言った。自分が泣きそうな顔をしていることくらいわかってた。だって、泣くのをずっと我慢しているのだから。これ以上、そんな未練たらしい顔を見られたくなくて、私は俯いた。

「…帰ろう。」

小さく呟いた言葉に、穂月さんは何も言わず立ち上がって私を抱きしめた。

「それが、あなたの選択…？」

穂月さんの腕の中で私はこくり、と頷いた。

これ以上、あなたが私のせいであんな悲しそうな顔をするなら…、私はここから出て行く。もう二度とあなたに会おうとはしない。ちゃんと、諦めるから…。

「帰ろう、穂月さん。…帰ろう。」

帰ろう、帰ろう、とそう縋る私を強く抱きしめ、穂月さんは何度も頷いた。わかったから、もういいよ、というように、彼女の綺麗な手が私の頭を撫でた。

3-9 秘めた想い

「本当にいいのか？ツナに会わなくて。」

「いいの。ていうか、武。その質問何回目？」

運転席の幼なじみに私は深いため息を吐きながら言った。だってよ、と未だ納得しない武に私は再びため息を吐く。

あの後、つまりは穂月さんに子どものように何度も帰ろう、と言った後、私は武に頼んでこうしてホテルまで送ってもらっている。当初渋っていた彼だったが、穂月さんからもお願いされると了承してくれた。

「いつ帰国するんだ？」

「…教えない。」

ホテルに着くやいなや聞いてくる武に私は眉間に皺を寄せて言った。予想外の答えだったらしく彼は虚をつかれたような顔をして、すぐに納得できないと口をへの字に曲げた。

「何だよ。」

「だって、帰国の日にみんなのこと連れてきそうなんだもの、あんな。挙句の果てには沢田くんも連れてきそう。」

凶星だったのか、あはは、とわざとらしい笑い方をする武に私思わず苦笑する。

「仕事忙しいんでしょ？頑張って働きなさい。」

「なんか、母ちゃんみてえだな。」

「こんなマイペースな息子はいりません。」

きっぱり言い放ち、どちらからともなく笑いだした。そういえば、あの日空港まで連れて行ってくれたのは武で、今回こうして沢田くんと会うきっかけをくれたのも武だったなあ。

「千景？」

背伸びをして、武の首に腕を回し、抱きしめた。武が驚いているのがわかる。いつも笑顔で余裕のある態度しか見せないだけにそれがなんだかおかしくて、私の顔は自然と笑みを浮かべる。

「ありがとう。…さようなら。」

ぱっと、武から放れ、ホテルの入り口で待っている穂月さんの所まで振り返らずに走った。

「ばいばい、武。」

「……………」

振り返り、そう言えば、武はどこか泣きそうな顔をしていた。

そんな顔、しないで？ 私は大丈夫だから。

心配性の幼なじみにそう伝われば良いと思いながら私は微笑んだ。

「千景。帰国が明日だって、武くんと言わなくて本当に良かったの？」

「良いの！だって、あいつ本当にみんなを連れてきかねないもの。」

「だって、もう会えないかもしれないでしょ？」

「うん。…でも、だからこそ、楽しい思い出だけ覚えていたいから。」

別れの記憶なんて、一度だけで十分だ。

「何でも自分の中で解決させちゃうのは、あなたの悪い癖ね。」
「え？」

「千景。想いつていうのはね、言わなければ伝わらないよ？」

わかっているよ。痛いほど、わかっている。

でも、じゃあ、本心を言ったら何かが変わるというのだろうか。この苦しい気持ちから無くなるというのだろうか。

「伝えることを、私は選んだんだよ。」

笑ってそう言ったら、穂月さんはひどく悲しそうな顔をした。

でもね、私には無理だよ。だって、これ以上、彼の悲しい顔を見たくない。

これ以上、悲しい思いをしたくないもの。

3-10 拉致（前書き）

今回少し長めです。

読みづらい文章かもしれませんがお付き合い合ってください。

3—10 拉致

武に送ってもらった翌日、私は穂月さんと共に日本に戻って来た。もう二度と沢田くんに会うことはない。会ってはいけない。だからこそ私は今度こそ前を向いて生きていかなければいけない。

その第一歩として、私は今、並盛に来ている。沢田くんとの思い出に溢れるこの町を嫌いになりたくはなかったから。嬉しいことも悲しいことも、全部ちゃんと受け止めたい。

そんな心機一転の思いで歩いている並盛だけど、今日はやけに黒いスーツの人が多い。昔、沢田くんの仕事相手だと穂月さんのお店に来ていた人達とどこことなく雰囲気似ている。関わり合いになりたくなくて、私は彼等を避けるようにして歩いていた。

「~~~~~?」

角を曲ろうとしたところで声が聞こえ、立ち止まった。つい先日まで聞いていた言語だった。つまり、イタリア語。

「~~~~~チカゲ、ニシザキ~~~~。」

会話の中で聞きとれた自分の名前に驚きに目を見張る。全く面識もなさそうな彼等が何故自分の名前を知っているのか。わかるのは、この人たちが何かの目的で私を探しているのだということ。彼等が何を言っているのか全くわからず、それでも必死に耳を傾けていると、男たちは不意に懷に手を差し入れ、それを取り出した。

鈍く光る無機質なそれに私は息を飲む。

日本では取り扱いが禁止されているもの、……銃だ。何でそんな物

騒なものを持っているのか皆目見当もつかないけれど、あまりいいことじゃないっていうのはわかる。

彼等は私が並盛に知っていることを知っていた。それはつまり、彼等は私の情報を持っているということだ。だからきつと実家は見張られているだろう。おそらく私に馴染みのある場所も全部。どこに逃げればいいのか、身を隠せばいいのかわからず、私はそこから動けずにいた。まるで猫に追い詰められたねずみのようだ。ない頭で必死に考えていると、突然、後頭部に固くて冷たい何かが押しつけられた。

呼吸が一瞬止まる。

「見つけた。お前がチカゲ・ニシザキだな。」

愉悦に満ちた流暢な日本語を聞いたのとはほぼ同時に私の意識は沈んだ。

次に目が覚めた時、私は両手両足を縛られた状態で転がされていた。よく見れば、そこは見覚えのある場所だった。

「…黒曜、ランド……。」

人目の少ないここは人攫いにはもってこいの場所かもしれない。それにしたって、自分が拉致された理由がわからない。でもここに長居するのは得策じゃない。そう思って、なんとか縄が解けないかやってみるが上手くいかない。

乙女のやわ肌をこんなに締め付けないで欲しい。跡になったらどうしてくれるんだ。そんなずれたことを考えていたら、私のいる部屋のドアが鈍い音を立てて開けられた。

「おや、お目覚めになりましたか？」

やけに芝居がかった口調に視線を向ければ、にこにこと笑っている男。日本人にはないスラリ、とした長身。グレーがかった瞳。

「あなた、誰…？何で、私を攫ったの？」

「ああ、君は何の事情も知らないんでしたね。ボンゴレのお姫様。」

訳のわからないことを言う男に私は自然と眉を寄せる。でも最後の一言だけは聞き逃せない。男は言った。

「ボンゴレ」と。

それは私の知らない沢田くんの秘密に関係する言葉。

「おや、ボンゴレという言葉には聞き覚えがあるのかな？君はボンゴレ10代目の最も大切な人らしいからね。利用させてもらおうと思ひまして。」

「ボンゴレ…10代目…？」

男は口元を歪ませ、私に告げた。

「沢田綱吉だよ。君には沢田綱吉をおびき出す餌になってもらいます。」

沢田、くん…？

「大変でしたより、君を見つけるのは。ボンゴレはとても上手に君を隠していましたから。」

隠す？私を？訳がわからない。

頭がついて行かず、混乱する私をよそに、男は愉悦からかまします

口元を歪め、笑みを浮かべる。

「これでようやく、ボンゴレ10代目の屍が見られる。」

クツクツと笑い声を上げる男の声に私の背中を冷や汗が流れる。

いや、それより、この男は今何て言った？

「あんた、沢田くんを殺すつもりなの…？」

私の問いかけに笑い声を消し、何も言わずその恐ろしい笑みを私に向けた。それが答えだった。こいつは、私を餌にして沢田くんを殺すつもりなのだ。やっと、そう頭で理解する。

「……ダメ……ダメ……。」

「ん？」

そんなの、ダメだよ。ダメ。そんなの、ダメ。

沢田くんが死ぬなんて絶対に嫌だ。あの人は、悲しいまでに優しいあの人は……、誰よりも幸せにならなくちゃいけないのに……！

「おや、気に入らない眼をしますね。」

男は私の顎を掴み、顔を覗きこんでくる。私は目を反らさず、男を睨んだ。

「気に入らない。お前の眼を見ているとボンゴレを思い出す。……ああ、気に入らないな。」

その瞬間、男の瞳に狂気の色が宿るのを私は見た。首を掴まれ、上半身を起こされた状態で壁に押し付けられる。喉を圧迫され、咳が

出た。

「ケホっ…。」

「非力な分際で俺にそんな眼向けるなよ。」

額に銃を押し付けられる。それでも私は男を睨むのをやめなかった。そうだ。そのまま逆上して、私を殺せばいい。私が死ねば、沢田くんを縛るものはない。

殺させない。絶対に、殺させたりしない。

「お前なんかに沢田くんが殺されるはずがない。」

そう言ったとほぼ同時に頬に鈍い痛みが走った。その衝撃に私は床に叩きつけられる。よくわかんないけど、たぶん、銃で殴られたんだと思う。口の中が切れたみたいで、鉄の味がする。

「……っ。」

なんとか痛みで上がる声を囁み殺す。それが気に入らなかったらしい男はさらに私に暴行を加えようと腕を振り上げた。

「それ以上彼女を傷つけてみる。灰も残さずに殺すぞ。」

突然聞こえてきた声に男の腕がぴたり、と止まる。

「やっと来ましたか。ボンゴレ10代目。」

ぼんやりとした視界の先には、オレンジがあった。とても優しい色をしたオレンジ。オレンジの炎を燈し、立っていたのは間違いなく沢田くんだった。少し遠くて、ぼやけた視界では彼の表情まではわ

からなかった。

「さ、わ・・・だ、く・・・ん？」

なんとなくだけど、沢田くんが笑ってくれた気がした。大丈夫だって、言われている気がした。安心していい状況じゃないのに、私は何故か安堵していた。

「彼女を巻き込んだこと、後悔させてやる。」

「随分と余裕ですね。こちらには人質がいるんですよ。」

沢田くんの放つ何かに押されてか、先ほどまで余裕を見せていた男が焦りを見せる。

「残念ながら、彼女は返してもらいますよ。」

「え？」

いつの間にか、私は誰かの腕の中にいた。

「お前は霧の守護者！」

「ご明答。ボンゴレに気を取られて気付かなかったようですね。」

「む：くろ、さん？」

「はい。もう大丈夫ですよ、千景。まあ、あの男は大丈夫ではないと思いますがね。」

最初の方の優しい声から一変。男に向けた骸さんの言葉は私が思わず身を縮めてしまうほどに冷たかった。

「ボンゴレの姫に手を出したんです。沢田綱吉の怒りは測り知れませんよ。もちろん、我々守護者の怒りも買ったんです。このマフィ

アも今日限りですね。」

「骸。無駄口はいいから、彼女をここから連れ出せ。」

「はいはい。普段温厚な人ほど怒ると怖いですね。」

そんな軽口を叩きながら、私の四肢を縛っていた縄を切り落とすと彼は私を抱き上げた。

「さわっ…！」

「後で会えるよ。だから、待ってて。」

その言葉が嬉しくて、私は泣きそうになりながら笑った。そして、骸さんに連れ出された。

3—11言えない言葉

頬に少しひんやりとしたものを感じ、私は意識を浮上させ、瞳を開ける。寝ぼけ眼の視界に映ったのは愛しい薄色だった。

「さ、わ・・・だくん？」

「うん。」

優しく髪を梳かれ、心地よさに眼を細めた。次第にはっきりとする視界に沢田くんの優しい笑みを捉える。

沢田くん。また、会えた。

そう思ったら涙が一筋頬を伝って零れた。その涙を見て、沢田くんは眼を瞋る。

「どうしたの？頬痛む？」

慌てた様子の彼に首を振るとゆっくりと体を起こした。見渡した部屋は見覚えのない場所で私は首を傾げる。

「ここは、地下施設なんだ。安全な場所だから大丈夫だよ。」

地下施設？何だってそんな所にいるのだろう。よくわからないけど、沢田くんがボンゴレとかいう組織の10代目だということと関係があるのだろうか？無理矢理自分を納得させる。

「頬、冷やしていたけどまだ少し赤く腫れているね。」

「でも、もうほとんど痛くないから。」

笑ってそう言えば、沢田くんは眉間に皺を寄せ、悲しそうな顔をし

た。

「沢田くん？」

「何で、何も聞かないの？何で、何も言わないんだよ。」

「……………」

聞けないし、言えない。だってそれは、ずっと自分に禁じてきたことなのだから。

「私は、沢田くんが無事ならそれでいいよ。」

「いいわけないだろ！！」

初めて聞く沢田くんの厳しい声に私はびくり、と肩を揺らした。驚き顔を上げれば、拳を振るわせ、とても苦しそうな顔で私を見る沢田くと眼が合った。

「俺のことより自分のことを考えろよ！殺されかけたんだぞ！」

そう。たぶん、沢田くんが後一步でも助けに来るのが遅かったら私は、死んでいただろう。あの男の瞳に宿る狂気は本物だった。それでも、沢田くんが生きてくれればいいと思ったから。

私はあの時、死を望んだんだ……………」

今更ながらにそれは、とても怖いことだと思った。私の死体を見て、沢田くんは何を思うのだろう。きっと、自分を責め続ける。自分のせいだと。それじゃあ意味がないのに。

「俺はあの時、全身の血が引いた。怒りだけが沸いて来て、目の前の男を殺すことしか考えられなかった。」

怒りと悲しみが入り混じったような顔をして沢田くんが声を絞り出すように言った。沢田くんにこんな顔をさせて、私は何をやっているんだろう。違うのに。笑って欲しいのに。どうして、上手いかないんだろう。

「…………ごめんなさい。」

謝罪くらいしか出来ることが思いつかなくて、私は俯いてぽつりと呟いた。

「何で、謝るのさ。巻き込んだのは、俺だろ。」

「違う、違うよ。そうじゃなくて、そういうことじゃなくて……………」

上手く言葉に出来なくて、でもちゃんと伝えたくて、私は無意識に沢田くんの手を伸ばしていた。でも、その手は沢田くんに弾かれた。今まで、一度だって避けられたことがなくて、私はただ茫然と沢田くんを見ていた。

「何も聞きたくない。君が言うのは俺を氣遣った言葉だから。」

「そんなこと……………」

「本心はいつも言ってくれないよね。…………怖かったっていう当たり前のことすら、俺には言ってくれないんだね。」

悲しそう揺れる瞳に胸が抉られるような気がした。そしてそのまま沢田くんは私に背を向ける。

「…………っ!」

言いかけた言葉唇を噛みしめることで飲みこんだ。彼のいなくなっ

た病室に残ったのは静寂と空を掴んだ所在のない私の手だけだった。
弾かれた手を胸元に戻し、もう片方の手で包み込む。涙が頬を伝い、
胸元で握った拳に落ちた。

行かないで。

そのたった一言さえ私は君に伝えることができなかった。

3-12 真実？（前書き）

今回長めです。

しかも長すぎたので？と？に分けました。

3-12 眞実？

拉致されたことと殺されかけたのだという事実は想像以上に私の心に疲労をもたらしていたらしく、私はその日の晩から熱を出した。2日ほど寝込み、その間ずっと沢田くんのいる地下施設もといアジトにお世話になることになった。

あの日以来、武や獄寺くん、骸さんに雲雀さんに了平さん、たくさんの方がお見舞いに来てくれた。でも、沢田くんだけはあの日以来ここには来ていない。みんなの話ではこのアジトにはいるらしい。

「愛想、尽かれちゃったのかな。」

脳裏に浮かぶあの怒りと悲しみを含んだ沢田くん瞳と表情を思い出し、自嘲染みた笑みが浮かぶ。

「辛気臭い顔してんな、千景。」

「リボーン？京子も。」

リボーンと一緒に入って来たのは京子だった。珍しい組み合わせに私は瞳を瞬かせる。とりあえずすぐ傍に置いてある椅子に座るように進めた。

「体調はどうだ？」

「うん。もう平気だと思う。………なるべく早く、出て行くから。」

「いつまで、意地を張るの？」

普段の京子からは考えられないとても冷たい口調に私は驚きながら顔を上げる。悲しさとも怒りとも焦燥とも違う不思議な色合いの浮

かんだ瞳があった。たぶん、全部を含んでいるのだと思う。でも、沢田くんの傍にいられる彼女にそんな瞳を向けられる理由がわからない。

あなたと私は違うのに。

置いて行かれた人間と傍にいられる人間。勝者と敗者で分けるのなら、あなたは間違いなく勝者なのに。

「京子の言っている意味がわからない。体調が回復したのなら、部外者の私は、ここから出て行くのが普通でしょう？」

部外者。

そうだ。私は、ここでは部外者なんだ。

自分の言葉に自分で傷ついているなんて莫迦みたいだ。でも、どんなにみんなのことを知っていても、この人たちが好きでも、沢田くんのことを……、愛していても、私は、部外者でしかない。

「だからお前は、ツナを諦めるのか？」

あなたがそれを言うの？ 私と彼を引き離したあなたが！

目の前の赤ん坊に殴りかかりたい衝動を必死に抑え、私は叫ぶように言った。

「諦めろって言ったのはリボンじゃない！！別れろって、言ったのはリボンじゃない！！なのに、何で今更掘り返すの！？私と沢田くんはもう、別々の道を選んだんだよ……！！」

泣き出しそうな自分を諷め、掌を力一杯握り込んだ。

何だっていうんだろう。今更、私に何を言えというの？泣き叫んで、置いて行かないでと、愛して欲しいと、そう言えばいいの？それでどうなるというの？そんなことをして、何になるっていうの……！？

「ちかちゃん。」

先ほどの冷たい口調とは違い、ずっと優しい声で京子が私の名を呼んだ。睨みつけた京子の瞳には涙が滲んでいた。そこには悲しさと安堵の色が浮かんでいた。

「今でも、ツツ君が好きなんだね。」

「……………」

何で、そんな穏やかな瞳で私を見られるの？ 私は、京子と沢田くんが並んだ姿を見ただけで悲しかったというのに。勝者の余裕？

「私が高校の時、ちかちゃんの背中を押したのは、2人が別れることを知っていたからだよ。」

優しい声色で告げられたのは衝撃的な言葉だった。

「ずっと前からツツ君がちかちゃんを好きなのは知ってた。でも、ちかちゃんとツツ君が付き合ったとし

てもツツ君は絶対にちかちゃんをイタリアへ連れて行かない。別れを選ぶって分かった。だから、私は心おきなくちかちゃんの背中を押せたの。」

「ずっと前？ 沢田くんは京子が好きだったんでしょ？」

「そうだよ。中学の頃までは、そうだったと思う。」

京子は瞳を伏せ、昔を懐かしむように話し始めた。

中学の頃、確かに綱吉は京子の事が好きだった。

共に苦難を乗り越えたこともあり、京子も次第に綱吉に想いを寄せ始めていた。互いの気持ちを打ち明けたわけではなかったが、交わる視線が、綱吉が自分に向ける眼差しが、想い合っているのだと2人に思わせてくれた。

2人は一緒にいられる。これから同じ道を歩むのだから。京子はそう思っていた。ずっと一緒にいられても、想いが通っていなければなんの意味もなかったというのに……。

中学3年生になり、季節がめぐって行く中で、京子は変化を感じていた。

ひとつは友達だった千景が日々元気を失くしていること。笑っているのに笑っていない。いつも何かに耐えるような表情をするようになっていた。気丈に振舞う千景に京子も花も何も言えなかった。そしてもうひとつ感じた変化。

それは、綱吉の視線が向かう先が変わったこと。

「ツナくん。」

「どうしたの？京子ちゃん。」

想われていることを感じていたあの頃と綱吉の態度は変わらないのに、確実に何かが変わった。

「好きな人いる？」

「……………」

京子の言葉に綱吉ははっとしたような顔をする。その顔を見て、京子は確信した。彼はもう、自分を想ってはくれないと。そしてきっと、今綱吉が想っているのは……。

「ちかちゃんが好き？」

「……………うん。」

目を、反らしてくれたりいいのに。もっと申し訳なさそうにしてくれたりいいのに。そう思うのに、綱吉の目は真っ直ぐに京子を見ていた。

「でもちかちゃん、好きな人がいるよ。今でも、その人を想ってるよ。」

千景の想い人が誰か京子は知らない。付き合っているのかどうかもわからない。それでも千景が誰かを想っていることは知っている。友達としてずっと千景の傍にいたのだ。彼女の変化くらいわかるつもりだ。そして、千景がまだその誰かを想っているであろうことだから諦めて、そう言いたかった。なのに……。

「知ってるよ。」

綱吉はそう言って笑った。困ったように、でもそこに悲しそうな色はなかった。

「それでも、好きなんだ。どうしても、思っちゃうんだ。俺が笑わせてあげたい。抱きしめたいって。」

それから綱吉は突然悲しそうに、眉を寄せた。

「ごめん。勝手だね。俺は確かに少し前まで京子ちゃんが好きだったのに。」

「……………」

ずるい人だと思う。そんな風に言われたら、そんな顔をされたら、

私は何も言えない。

「謝るのは、違うよ。」

「うん。」

「一度だけ、抱きしめて？それで全部なかったことにするから。明日からは今までと同じように接するから。」

「……わかった。」

綱吉は京子を優しく引き寄せると包み込むように抱きしめた。そこにあるのは友情なのだと思おうと涙が出てきた。

いつのまにか綱吉の心を持って行ってしまった千景が憎いとも思った。悔しくて、悔しくて……。

それでも、時間の経過と共にそれは少しずつ京子の中で消化されていった。いや、そう思っていた。

3－12 真実？（後書き）

真実？は明日以降に更新したいと思います。

3-13 眞実？

高校3年生に上がる少し前から綱吉と千景はぐっと距離を縮めた。何かを吹っ切ったらしい千景は以前のように明るく快活になった。そしてとても綺麗になった。多くの男の目を惹くほどに綺麗になった千景を見つめる綱吉の表情は時折複雑で、でもとても愛しげに彼女を見た。

自分には向けられなかったその眼差しに消えたはずのあのどろりとした思いが再び京子の中に蘇った。傷ついてしまえばいいと思った。

自分が傷ついたように綱吉も千景も傷つけばいいと思ったのだ。だからようやく綱吉への気持ちを確認した千景の背を押してやった。たとえ互いに想いを伝えあい、付き合いたとしても、綱吉が千景を連れて行かないことを知っていたから。

そして予想通り、想いを通わせたはずの2人は別れを決めた。傷ついた2人を見て、満足するはずだった京子の心に溢れたのは罪悪感。それでも、なんとしても京子は綱吉の心を取り戻したかった。

イタリヤに渡った後、京子は自分に出来る限りで綱吉を支えた。綱吉も京子を色んな場所へと連れて行ってくれた。大勢いるマフィアの令嬢に綱吉は見向きもしなくて、彼に一番近い女は自分だと京子は思っていた。

あの日の会話を聞くまでは……。

「おい、ツナ。お前京子を恋人にするつもりか？」

「何だよ、突然。」

「京子だけ特別扱いにしてるからな。」

からかうようなりボーンの口調に綱吉はため息を吐いた。

「俺が誰を特別扱いしているのか知っているくせに。」

「そうだな。お前のおかげであいつは平和な毎日を送ってるぞ。」

「そうじゃないと意味がないよ。」

「というわけだ。残念だったな、京子。」

「え?」

「あ……。」

突然扉が開けられ、驚きに目を瞠る綱吉と目が合った。どうやら京子の存在に気付いていたのはリボーンだけだったようだ。

「京子ちゃん……。」

「ねえ、ツツ君の特別な人って誰……?」

半ば予想はつきながらも、それを否定して欲しくて京子は尋ねた。しかし綱吉は何も言わなかった。真っ直ぐに京子を見て、ただ一言ごめん、とだけ言った。

「……して?」

どうして、彼女なの? どうして、何も知らない彼女がそんなに愛されるの?

「どうして私じゃだめなの!??」

「約束したから。」

「…………っ!」

そう言った綱吉の表情に京子は言葉を失った。久しく見るここのな

かった綱吉の本来の優しい笑みを浮かべていたから。どんなに傍にいても自分には向けられることのなかった彼の笑顔。それを引き出せるのは今は遥か遠くにいる彼女だけなのだ。

「誰のものにもならない。そう約束したんだ。」

綱吉は、変わることなくたった一人を想い続けていた。どうしたって、綱吉の心は手に入らないのだと、京子は理解した。

京子の告げた最後の一言。

それは、私が最後の最後で願ったことだった。他の誰でもない。私のための願い。

「約束したの、ちかちゃんだよね？」

「……………」

京子の言葉に私は何も答えることが出来なかった。

「ごめんね、ちかちゃん。私、たくさんあなたを傷つけた。だから私がちゃんと、話さないといけないと思った。」

「京子……………」

「ねえ、ちかちゃん。あなたが思うほどツツ君は遠い人なんかじゃないよ。」

「……………」

胸が一杯で言葉が出ない。囁くようなあの一言を彼はずっと忘れな
いでいてくれた。

あんなに遠くに行ってしまったと思っていた沢田くんの心は、こん

なにも傍にあったのだ。

3－13 真実？（後書き）

もうすぐ完結となります。

3-14 本音

このまま別れるべきなのか、それとも…。

何度考えても答えを見つけないまま、私はこのアジトを去る時が来た。体調も整い、頬の腫れだってひいた。なのにいつまでもここににいるわけにはいかないから。

みんな仕事があるらしく全員にお礼を言うことはできなかったから、私はアジトにいる人だけに挨拶をして回っていた。

そして、最後に沢田くん挨拶するため、私は今訓練室に来ている。入ってみるとオレンジの炎をともした沢田くんが雲雀さんと組み手をしていた。集中していた2人だが、私にすぐに気がつき、構えを解いた。沢田くんの額から炎が消える。彼は気まずそうに私から視線を外した。

「帰るんだ？」

いつの間にこんなにちかくまでやってきたのか、雲雀さんが私の顔を覗きこむように尋ねてきた。その近さに半歩後ずさりながら、私は頷く。

「心は、決まったのかい？」

何もかも見透かされていることに驚きながら、未だ答えの出ていない私は曖昧に微笑んだ。

「ちゃんと話せば？」

雲雀さんは励ますように私の頭をぽんぽん、と撫でると訓練室を出て行った。残された私と沢田くんは距離を縮めることも出来ず、沈黙が流れた。

「どうして、ここに？」

暫くして沢田くんが口を開いた。しかし顔は背けられたままだ。

「リボーンがここ最近は荒れてるから雲雀さん辺りと訓練室で暴れてるだろうって。」

「そっか。」

「うん。……私のお願い事、覚えてくれてたんだね。」

唐突な私の言葉に沢田くんは眼を瞬かせた。

「誰のものにもならないで。」

その言葉に沢田くんがようやく私の方へ顔を向けてくれた。驚きに揺れた瞳が私を映している。

彼の瞳に自分が映っているそんな些細なことがどうしようもなく嬉しかった。

「ありがとう。我儘をきいてくれて、ありがとう。」

私は今、笑えているのだろうか。笑えていたらいいな。沢田くんには笑顔の自分を覚えておいてほしいから。

「帰るの？」

「うん。」

「……元気でね。」

……どうして？
どうして、そんなにあっさり別れを告げるの？ どうして、何も話してくれないの？
やっぱり私だけなのだろうか。放れたくないと思っているのは……。私だけが未だに彼を想っているのだろうか……。私は無意識に服の裾を握り込んでいた。

「本心を言ってくれないのは沢田くんも同じじゃない。」
「え？」

「何で、何も言ってくれないの！？ 私には本心を言ってくれないとか言って、沢田くんだって全然何にも言ってくれない！ あたしばかりぐるぐるしてて、莫迦みたいじゃない！！」

「なっ！ 俺だって色々考えてるよ！ いつも本心を言ってくれないのはそっちだろ！」

声を張り上げた私に沢田くんも負けじと声を荒げて言ってくる。

「じゃあ言わせてもらいますけど、私が本心を言ったら何か変わるの！？ 沢田くんは私を受け入れてくれるの！？」

「そ、それは……。」

「受け入れてもらえないのに、本音なんか言いたくない！」

本当はこんなことを言いに来たわけじゃないけど、ずっと心の奥に溜まっていたものが爆発して私は自分で自分の感情を制御出来なくなってしまうていた。

「西崎さん……。」

「こっち来るな、莫迦！ 沢田くんなんか大嫌い！」

私は肩から提げていた鞆をこちらに一步踏み出した沢田くんに向かって投げつけた。力一杯投げたそれだけど、沢田くんは難なく受け止めた。

「キャッチすんな！」

「いや、するから！当たったら痛いから！」

他に投げる物を捜したが訓練室には物なんて置いてなくて、気がついたら沢田くんは私のすぐ目の前に立っていた。

「沢田くんなんて嫌い！勝手に人の幸せ決めつけて放れていく沢田くんなんて嫌い！本心を言ってくれない沢田くんなんて嫌い！大っ嫌い！」

「あんまり嫌いって言われるとさすがに傷つくんだけど。」
「！！！」

大きなため息と共に私は沢田くんの腕の中に閉じ込められてしまった。抵抗を許さないくらいの力で抱きしめられ、私は身動きすら取れなかった。

「本音を言わないのは嫌われるのが怖いからだよ。誰のためでもない、俺が憶病だからだ。」

「沢田くんが憶病なのなんてずっと前から知ってたし。」

柔らかくなった沢田くんの声色に絆されそうになるのを必死に押しとどめ、刺々した口調を心がける。そんな私の考えなどお見通しなのか、沢田くんの笑い声が頭の上から降ってくる。

「本音を言って変わらない現実を受け止めるのが怖いのは俺も同じだよ。」

「……でも言わないと変えられる現実も変わらないよ。」

「それはお互い様でしょ？」

「……まあ、そうですね。」

拗ねたように返せば、沢田くんがまた笑った。なんだか恥ずかしくなって、頬に熱が集まる。

だけど、この場所は居心地がいい。今は、悲しさもなく、ただ居心地がいい。

「好きだよ。」

突然降って来た言葉に私は沢田くんの胸に手をつき、顔を上げる。優しい瞳が少しの不安を織り交ぜて私を見下ろしていた。

「君が好きだよ。」

君は？

瞳でそう問われ、こくり、と喉になる。言ってもいいのだろうか……。

「好き。好きだよ。だからお願い……、置いてかないで……。」

「うん。もう、ぐちゃぐちゃ考えるのはやめるよ。どうしたって忘れられないし、手放せないんだから……。」

優しい瞳の中にあった不安が消え、穏やかに揺れる瞳が私を見つめる。

どちらからともなく顔を寄せ合い、もうすぐ唇に触れるそれを期待し、私は瞳を閉じた。それと同時に唇に柔らかいものが触れる。触れるだけのそれがそっと離れ、私は瞳を開く。

見つめ合い、微笑みあう。しかしどちらからともなくそれは歪み、私の瞳からは涙が溢れた。互いを強く、強く抱きしめ合った。私は

沢田くんの胸に顔を埋め、声を上げ泣いた。

やっと、捕まえた……。。

3－14本音（後書き）

次回最終話です。

もう少しお付き合いください。

エピローグ

桜の蕾が膨らみ始めら今日この頃。春というにはまだ寒いその日、私は大学の卒業式を迎えていた。

「そう言えば千景。あんた何処に就職決まったの？」

「いや、まだ決まっていななんだよね。」

苦笑いを浮かべてそう言えば、友人たちから驚きの声が漏れる。それはそうだろう。自分で言うのもなんだが私は真面目に勉強してきた、専攻していた外国語文学の他にも経済学なども学んでいて、色々な道が選択できるはずだったのだ。しかし、私はもう卒業後の進路を決めているから。

「私ね、卒業したらイタリアへ行くの。」

「「イタリア!？」」

再び驚嘆の声。だがみんなすぐに納得がいったようになり顔になる。何故そんな顔をされるのかわからず、私は首を傾げた。

「あんた、イタリア語勉強していたものね。」

「特にイタリア旅行に行ってからにはより熱心に。」

「そ、そうかな。」

視線を反らせばくすくすと笑い声が聞こえてくる。何だか全部お見通しのように恥ずかしさに頬が熱を持つ。

「イタリアに行くのはいいけど、ちゃんと連絡は寄こしなさいよ。」
「うん!みんな、卒業おめでとう。」

みんなで祝福しあい、私たちは別れた。

まだ風は冷たいが日差しは温かな太陽の下、私は馴れない袴を着たまま大学内を歩く。4年を過ごしたこの場所とも今日でお別れだ。そして、この国ともしばしのお別れ……。

「千景。」

聞きなれた愛しい声に私は足を止め、振り返った。そこにはずっと想い続けていた愛しい人。相変わらず、スーツ姿が似合うな、なんて思っと思わず微笑む。高校時代のまだ幼さの残る顔立ちから随分成長して、彼は大人の男になった。

「卒業おめでとう。」

「ありがとう。」

近づいてきた私に綱吉くんはそう言ってくれて、私ははにかみながらお礼を言った。

私は今日、この人と共にイタリアへ渡る。大好きな家族も友達も残して、私は綱吉くんについて行く。

「……後悔しない？」

不安気な声に顔を上げれば、案の定、綱吉くんは情けない顔をしていた。まるで捨てられた犬の様だ。そんな彼に私は呆れたようにため息をつく。

「何を今更。だいたい、私が後悔するかもって言ったら綱吉くんは私を置いて行っちゃうわけ？」

「うん。それは無理。」

「ならその質問無意味じゃない。」

はっきりと断言する綱吉くんには再び呆れながら彼を見上げる。私の態度に腹を立てるでもなく、綱吉くんは優しい笑みを浮かべながら私の頬に手を伸ばす。

「千景と離れるのはもう無理だけど、でも、後悔をして欲しくないのも本当だから。」

つまり彼は、言葉にして欲しいのだ。どうにも出来ないことだけれど、自身も再び覚悟を決めるために。

私は頬に触れている彼の手に自身の手を重ね、真っ直ぐに綱吉くんを見上げた。

「後悔なんてしない。私は、君の傍にいたい。……離れたくない。」

「うん、放さない。好きだよ、千景。……愛してる。」

綱吉くんの顔がゆっくりおりてきて、私はそっと瞼を閉じた。最初は浅く、次第に深く口付けられる。愛し、愛されているのだと感ずる。

私はこれからずっと、大好きな彼の傍で生きていく。もう、離れたりしない。

エピローグ（後書き）

これで完結となります。

長らくお付き合いいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1656w/>

君と私の恋愛模様

2011年11月27日21時56分発行